

ジュリエットたち

登場人物

スマレ

雲雀旅館 女将

ユリエ

その妹

紀子のりこ

従業員

江美えみ

従業員

千夏ちなつ

泊り客

亜紀あき

泊り客

早苗さなえ

泊り客

絹代きぬよ

泊り客

京子きょうこ

女優

トミオ

キャピュトールホテルの跡取り息子

午平ごへい

スマレの夫

三十代とおぼしき三人の女、亜紀、千夏、早苗が、亜紀の部屋の小さなテーブルで鍋を囲み、ささやかな飲み会を開いている。そのうち早苗だけが何やら怒りに顔を歪めている。

早苗 ああっ！ もう腹が立つ、腹が立つ、頭にくる！

千夏 まあまあ。呑みねえ、呑みねえ。

早苗 大体さ、「嫌いになったわけじゃない」ってどういうことよ！

千夏 そうそう。嫌われたわけじゃないさ。

早苗 「僕よりも君にふさわしい男がいるはずだ」ってなんなのよ！

千夏 いるいる。男は星の数ほどね。

早苗 そういうことはあたしにふさわしい男を連れて来てから言えっつー

の！

千夏 ごもつともごもつとも。

早苗 あたしは一人でも生きていけるけど、彼女には自分がついていないとダメなんだって！ 馬鹿じゃないの？ 一人でも生きていけるのに、あえて二人で一緒にいたいって思うのが恋愛の醍醐味だいごみなんじゃない。ちよつと頼りにされたからっていい気になっちゃって……。もう抹殺！ 削除します！ あんな奴、あたしの人生に現れなかったことにする！

千夏 めでたしめでたし。

早苗 ちよつと、亜紀い！ 千夏が真面目に話聞いてくれない！

千夏 失礼な。ちゃんと聞いてるよ？ 今の話を要約するとだね……。

早苗 ……なによ。

千夏 (きつぱりと) 早苗は一人でも生きていける。

早苗 ふざけんな！

亜紀 (二人のやりとりにくすくす笑いながら) 相手はどんな強敵だったわけ？

早苗 どうってことない子だから頭にくるの！ 美人てわけでもないし、仕事は出来ないし、注意されるとすぐ泣くし。

千夏 つまり、「親しみやすく守ってやりたくなるタイプ」と。

亜紀 で、若いんだ。

早苗 (ものすごく言いたくなさそうに) ……二十一だって……。

千夏 それは強敵だわ。あたしたちが高校までバス通学してた頃、幼稚園バスに乗ってた世代でしょ？ かなわないかなわない。

早苗 あたしだって生まれた時から三十代だったわけじゃないんだよ！ あ

あ、やだやだ。親にまで紹介してようやくゴール直前までたどりついたと思っただのに、また振り出しからなんてもううんざり！

亜紀 焦ることないって。今どき三十代で結婚してない女なんて珍しくもなんともないじゃない。

早苗 あたしは子供が欲しいの！ 若いお母さんになるのが夢だったの！

もう今日産んでも遅いくらいなの！

亜紀 (早苗の迫力にやや圧倒され) 今日産んでも遅いんだ……。

千夏 若作りのお母さんにならまだなれるんじゃない？

早苗 (深いため息) あんたたちはいいわよ。しがないOLのあたしと違って、稼ぎのいい仕事はあるし、結婚願望はこれっぽっちもないし……。

亜紀 あるわよ、これっぽっちくらいなら。

千夏 製薬会社の研究職なんて大した稼ぎにならないよ？

早苗 マンション買ったくせに。

千夏 あれは株で儲けたんだもん。

早苗 千夏……。株は買う、スポーツ新聞は読む、赤ちょうちんに一人でふらりと呑みにいく……。そんなおっさんみたいな暮らしのなにが楽しいの？

千夏 なにかもが楽しいけど。

早苗 ……あたしも千夏みたいになりたいよ……。

亜紀 そろそろ電車なくなるよ？ どうする？ 二人とも泊まってく？

早苗 泊まってく。一人の部屋には帰りたくない。

千夏 あたしも。ゴミ溜めのような部屋には帰りたくない。
亜紀 じゃあ、お風呂入れてくるね。

亜紀、退場。

千夏 (亜紀の去って行った方を見たまま) ……この間さ、見ちゃった。

早苗 なにを？

千夏 亜紀がスーパーで男と買物してるところ。

早苗 うそ！

千夏 あれは多分……。

早苗 なになに？

千夏 ……鍋の材料だね。

早苗 メニューのことなんてどうでもいいよ！

千夏 もう鍋って季節じゃないと思わない？ 他に得意料理ないのかな。

早苗 いいんだってば！ 料理のことは！ で、なに？ それは彼氏なの？

千夏 そうじゃないの？ 亜紀にしては珍しくだらしない顔してたし。

早苗 聞いてないよ、そんな話。

千夏 言えなかったんじゃない？ 早苗、結婚に向けて近寄りがたいほどの

猛スパートかけてたから。

早苗 (一気に暗くなり) ……今、せつかく忘れてたのに……。

千夏 ま、亜紀はもともと秘密主義などころがあるしね。

亜紀が旅行のパンフレットを手に戻ってくる。

亜紀 ねえ、ひさしぶりにみんなでさ……

早苗 水臭いよ、亜紀！

亜紀 ……それは今お風呂を入れてきたこととなにか関係ある話でしょう
か？

早苗 いくらあたしが振られたばかりだって、友達に彼が出来たことを喜んであげる余裕くらいあるんだよ？（自分の言葉にナーバスになり）……「振られた」って言わないでよ！

亜紀 ……さっぱりわかんないんだけど。

千夏 この間、亜紀ちゃんが一緒に鍋を作ったお相手は誰だったのかしらって話。

亜紀 ……なんでそんなこと……。

千夏 （ダンディに）おっさんの勘だよ。

早苗 （家捜しを始め）写真は？ 写真ないの？

亜紀 あるわけないでしょ。彼氏じゃないもん。

早苗 嘘だあ。あんなに幸せそうな顔して？

千夏 あんた見てないじゃん。

亜紀 営業先の人だよ。最近は旅行代理店も競争が厳しくてね。激安パックとか集客率の高いツアーを組むためには、そういう接待でもして無理をきいてもらわなきゃいけないわけ。

早苗 なんだ。つまんないの。

千夏 接待ねえ……。

亜紀 そんなことよりさ、温泉行かない？

早苗 傷ついた友達を利用してまで営業成績を上げるつもり？

亜紀 傷ついた心と体にはやっぱり温泉でしょ。しばらく三人で旅行もしてないしさ。素敵な出会いがあるかもしれないよ？

早苗 素敵な出会いがあるなら行く！

亜紀 ……「かもしれない」だから……。

千夏 どっかお薦めの宿でもあるの？

亜紀 誰に言ってるの？ プロだよ？ あたし。（パンフレットを開き）ほら。ここなんてどう？「川のせせらぎが聞こえる檜造りの露天風呂」！ 歴史のあるいい旅館なんだけど、今、あんまり流行^{はや}ってないから狙い目だよ？

早苗 なんて流行ってないのよ？

千夏 (おどろおどろしく) 幽霊が出たりして。

亜紀 出るかもねえ。古い旅館だから。

千夏 いいね、いいねえ。

早苗 どうせならいい男の幽霊に出てほしいなあ。

亜紀と千夏、呆れ顔で早苗を見つめる。

暗転。

2

雲雀旅館のロビー。

まだ若いながらもこの旅館の女将であるスマレが登場。

スマレ ねえ、紀子さん。

「はいはい」という声とともに、仲居の紀子が現れる。

紀子 なんででしょう？

スマレ ユリエはどこ？ ちょっと呼んできてくれる？

紀子 承知しました。(思いきり息を吸い込んでから、大声で) ユリエさーん！
女将さんがお呼びですよー！

スマレ ……紀子さん……。

紀子 (再び大きく息を吸いこんでから) 早くいらした方が身のためですよ

ー！ スマレさんを怒らせると怖いですよー！ ユリエさーん！

スマレ 無精ぶしようしないで探してきてよ。

ユリエ、やや慌てて登場。

ユリエ 紀子さん！ お客様がいらつしやるのに……。

紀子 当旅館に現在お泊まりいただいているただ一人の奇特なお客様は、今、露天風呂に入っておいでです。

スマレ 皮肉は結構。席をはずしてくれる？ 二人だけで話したいから。

紀子 はいはい。(と席をはずす)

ユリエ あらたまつてなんなの？ お姉さん。

スマレ 大事な話。実はあなたに……。

スマレとユリエ、離れた場所から聞き耳を立てている紀子をじーっと見つめる。

スマレ ……紀子さん。戻ってらつしやい。あなたにも聞いてもらいます。

紀子 (あからさまに嬉しげに) いいんですか？ 私なんかお邪魔しても。

スマレ ダメと言っても無駄でしょう？ (ユリエに) あなたにお見合いの話が来てるの。

紀子 (頬に手を当て) まあ！ どうしましょう！

スマレ ……念の為に言っておくけど、紀子さんにじゃなくて、ユリエにだから。

ユリエ お見合い？

スマレ お相手は、ありすがわ有栖川先生の……。

紀子 (割って入って) 有栖川先生ってあの代議士の？ この辺り一帯の大地主様じゃないですか！

スマレ (気を取りなおして) その有栖川先生のご長男の……。

紀子 (再び割って入って) あそこのご長男は成績優秀、品行方正、加えてマネキン人形みたいに整ったお顔で、あんなに整ってたらまばたきもしないんじゃないかって……。

スマイレ （永遠に続きそうな紀子の言葉を遮って） そのハンサムなご長男の たつてのご希望だそうよ。

ユリエ 私……まだ結婚なんて……。

紀子 たま 玉の輿こしですよ！ ユリエさん。

スマイレ ……わかってると思うけど、うちは今、経営が苦しいの。川向こうに大きなリゾートホテルが建って以来、すっかりお客様を取られてしまつて。

紀子 本当にねえ、百年続いたこの雲雀旅館が、今では雲雀どころか閑古鳥かんこどりが鳴いてるんですから。スマイレさんとユリエさんのご両親がまだ生きていらした頃は、毎日、目の回るような忙しさでしたのに。あれは私が中学を卒業して、こちらで仲居を始めたばかりの頃ですよ、まだよちよち歩きのユリエさんが、忙しい私たちを見て「あたちもお手伝いしゆる！」ってお膳を運び出したまではよかったんですけど、案の定、すってんと転んで、お風呂上りのお客様に、すっかりお料理をぶちまけちゃって……。

ユリエ 紀子さん、もう、その話は何十回も……。

紀子 それから高校生だったスマイレさんが、一人旅の大学生にひとめぼれして、一緒にラブレターの文面を考えたこともありましたっけ。

スマイレ 紀子さん……。

紀子 確か出だしは（夢見る少女のような声色で）「浴衣姿ゆかたのあなたをひと目見た時から」って。いきなり「浴衣姿」から始めるのはちよつといやらしいんじゃないかって私はとめたんですけど……。

スマイレ それ以上思い出したくもない昔話を続けるなら、はずしてもらおうわよ？

紀子 黙ります。はい！ もう黙りました！

スマイレ （ユリエに）有栖川先生は、この縁談がまとまれば、援助も惜しまないと言ってくださってるの。

紀子 結構なお話じゃないですか。ご長男も直じきに立候補なさるつてもつぱらの噂ですから、きっとその前に身を固めておしまいになりたいんですよ。

ユリエさんをお選びになるなんて、やっぱり偉くなられる方は目のつけどころが違いますね。ユリエさんだったら、私もお嫁さんに欲しいくらい。おしとやかだし、優しいし。スマレさんはねえ、ちよつと気の強いところがあるから……。

スマレ 紀子さん！ もうすぐお客様がおみえになる時間でしょ！ お部屋の準備はできてるの？

紀子 (悪びれた様子もなく) そちらはもう江美ちゃんの方でしっかりと。

そこへ若い仲居、江美が登場。

江美 女将さん、鶴の間のお客様、大丈夫でしょうか？

スマレ どうかなさったの？

江美 もう二時間近くもお風呂からお出にならないんですけど……。

ユリエ 私、見てきましたようか？

スマレ あたしが行く。(ユリエに) 承知してくれるわね？ あなたにとってもいいことなんだから。

スマレ、江美とともに退場。

残されたユリエはどことなく物憂げな様子。

紀子 浮かない顔ですねえ。誰か他に好きな人でもいるんですか？

ユリエ そうじゃないけど、急なお話でびっくりしちゃって……。

紀子 ユリエさんは何不自由ない生活ができる、雲雀旅館は助かる。いいことづくめじゃないですか。

ユリエ そうね……。お姉さんには、ずっと苦勞をかけてきたんだし……。

「こんにちは」という声とともに、旅行鞆を持った亜紀が登場。

亜紀 今日からお世話になります……

紀子 野島様ですね。ようこそお越しくださいました。

亜紀 よろしくお願ひします。(ユリエに) ずいぶん若い女将さんだっとうかがってましたけど、あなたが……。

ユリエ いえ、私は妹なんです。

亜紀 そうですか。

ユリエ すぐここがお分かりになりましたか？

亜紀 実は駅前でたまたまかた近所の方に……。

早苗と千夏が登場。

早苗 あったじゃない！ いきなり素敵な出会いが！

千夏 ちょっと若過ぎない？ あたしたちが高校行ってた頃、ランドセルしよってたくらいの子だよ？

早苗 十何年も前の通学状況でゼネレーションギャップ計るのやめてくれな
い？

亜紀 (ユリエたちに) 車で送ってもらったんです。ちょうど同じ方向だからって。

早苗 この近くに喫茶店ありますか？ (亜紀に) お礼にお茶でもご馳走しよ
うよ。

千夏 おっと早苗選手、早くもエンジン全開です！

ユリエ こちらのロビーでよろしければ、コーヒーをお持ちいたしますが。

亜紀 すみません、じゃあお願ひします。

ユリエ 四名様でよろしいですか？

亜紀 ええ。

ユリエ ただいますぐに。(紀子に) お荷物をお願ひね。(退場)

早苗 (袖に向かつて) あっ！ 帰っちゃダメダメ！ 今、お茶ご馳走する
から！ 入って入って！

トミオが爽やかに登場。

トミオ ありがとうございます。でも、僕はこれで……。

早苗 コーヒー飲む時間ぐらいあるでしょう？

紀子 あらまあ、こんなに若くて素敵な方がこの辺りにいらしたかしら？

トミオ 父の仕事を手伝いに来てるんです。今までずっと留学していたんですが、ようやく卒業できたもので。

亜紀 留学ってどちらに？

トミオ イギリスに六年ほど。

早苗 ハーバード？ コロンビア？

亜紀 早苗……。それ、アメリカの大学……。

紀子 お父様はなんのお仕事を？

トミオ その川の川を渡ったところで……。

そこへユリエがコーヒーを持って現れる。

その姿に、目が釘付けになるトミオ。

ユリエ お待たせしました。外は暑いのでアイスコーヒーにしましたけれど

……。

ユリエ、トミオの熱い視線に気づく。

見つめ合う二人。

これぞ運命的な出会いと言わんばかりの音楽が盛大に流れる。

早苗 ……今、なんかドラマチックな音楽が聞こえなかった？

千夏 早苗ちゃんの素敵な出会い、早くも終了。

亜紀 あたし初めて見たわ。ひとめぼれの瞬間って。

外野の声など耳に入らず、ひたすら見つめ合う二人。

ユリエ (コップを渡しながら) お砂糖とミルクはどうなさいますか？

トミオ (その手を取り) 砂糖もミルクもいりません。ただお名前をいただきます。

ユリエ (戸惑いながらも) ユリエです。

トミオ (ユリの香りを楽しむように) 美しい花の名前ですね……。

ユリエ 姉はスマレといって、この旅館の女将を……。

トミオ お姉さんの話は次の機会に。今はあなたのことを聞かせてください。

紀子 (二人の邪魔をしないよう小声で亜紀たちに) お客様ー。お部屋にご案内いたします。

千夏 (トミオを真似して) 「花の名前ですね……」。言えないよ、なかなか。さすが西洋仕込みだね。

亜紀 (いつまでも二人を見ている早苗に) ほら、行くよ！

紀子に続いて、コーヒーを手にこそそと退場する三人。

そんなことには気づきもしないトミオとユリエ。

ユリエ こちらへはご旅行で？

トミオ 仕事のはずでした。今となつては、あなたに会うためです。

ユリエ ……お名前を伺っても？

トミオ トミオです。その手で富をつかむ男とみになれと、父がつけてくれました。

ユリエ それは頼もしいこと。

トミオ 富なんかより、もっと素晴らしいものをつかんでしまったようですよ……。(と、ユリエを抱き寄せようとする)

ユリエ (抵抗して) いけません！

トミオ （我に返り）すみません！ 海外生活が長かったもので、つい、ス
キンシップが過剰に！ 誤解しないでください！ 僕は出会ってから三分
も経たないうちに女性を口説けるような人間じゃないんです！ こんなこ
と初めてで……こんな……（再び潤んだ瞳でユリエを見つめ）こんな僕の
ことがお嫌いですか？

ユリエ 嫌いだなんてそんな……さっきは気が動転してしまつて……。

トミオ じゃあ、今は？

ユリエ だって……「もう落ちつきましたから、さあ、どうぞ」なんて言え
ません。

トミオ ……なんて素直で可愛い人なんだ……。

再び、ユリエを抱き寄せようとするトミオ。

そこへバタバタと慌てた様子の江美が現れる。

江美 ユリエさん、大変です！（トミオを見て）あ！ おまえ、なにしに来
やがった！

ユリエ どうしたの？ 江美ちゃん。失礼じゃない。（トミオに）ごめんなさ
いね。

江美 謝ることなんてないですよ！ そいつ、誰だかわかってるんですか？
キャピュトールホテルの回し者ですよ？

ユリエ キャピュトールホテルつて川の向こうの……？

江美 女将さんが目の仇かたきにしてるライバルホテルの跡取り息子ですよ！

トミオ ライバルだなんて……うちのホテルはなにも……。

江美 聞きました？ 雲雀旅館なんて相手じゃないって！ 帰れ帰れ！ プ
ールだのジャグジーだのエステサロンの、ちよつと設備が整つてるから
つて、いい気になるな！

トミオ （江美に）君、どこかで見たことあると思つたら、うちのバイキン
グでケーキ四十個平らげた子じゃあ……。

江美 (トミオを力尽くで追い出し) 今度この敷居をまたいだらタダじゃ
おかないからね!

トミオ (追い出されながら) ユリエさん! 必ずまた……!

江美 二度と来るなっ! (ユリエに) 甘い顔しちゃダメですよ。

ユリエ (まだボーっとしたまま) 江美ちゃん……ケーキ、食べ過ぎ……。

江美 敵状視察です! (ハツとして) そうだ! 大変なんですよ! 鶴の間
のお客様、お風呂で倒れていらしたんです。転んで頭を打ってるみたいで。
救急車を呼ばなくっちゃ!

江美、慌てて退場。

一人、残されたユリエ、トミオの去っていった方を呆然と見つめる。

ユリエ キャピュトーレホテルの跡取り……あの人が……?

救急車のサイレンの音とともに暗転。

3

前場から数時間後の雲雀旅館の室内。

思案顔のユリエと紀子。

紀子 しかし、困りましたねえ。

ユリエ でもよかったじゃない。大したお怪我もなさらなくて。

紀子 ご家族に連絡だっつつかないし、それよりなにより……。

江美が入ってくる。

ユリエ　　どんなご様子？

江美　相変わらず、ひと言もお話しになりません。心ここにあらずって感じ
で。今はよく眠っておいでです。

そこへ亜紀たち三人が恐る恐る顔を出す。

早苗　あのお……。

紀子　はい。なにか？

亜紀　お取り込み中にすみません。お風呂で倒れた方、お加減はいかがです
か？

早苗　どうしても気になっちゃって。

ユリエ　今、お休みになられました。大したお怪我也なさらなかったようです。

紀子　記憶はなくされてしまったみたいなんですけどね。

ユリエ　紀子さん！

早苗　記憶喪失？　大変じゃないですか！

ユリエ　一時的なことだとは思うんですけど……。

スマレの「山田様！」という声に追われながら、突然、勢いよく絹代
が入ってくる。

スマレ　山田様！　どうなさったんです！

絹代　（ユリエに）「ああ、いつも優しくして下さいる神父様、あの方は？」

ユリエ　……はい？

絹代　「お話の筋道はよく憶えております、ここがその場所……」

紀子　あの、山田様？　本当におぼえていらっしやいますか？　お風呂で倒
れられたんですよ？

絹代　「どこにいます、私のロミオは？」

ユリエ、「ロミオ」という音に一瞬、過敏に反応する。

その他の人間の間には、言いようもない緊張の空気が流れる。

早苗 ……今、「私のロミオ」って言ったよね？

亜紀 言ったね……。

千夏 じゃあ、この人、ジュリエットってこと？

絹代 「ああ！」

全員、ビクッとすくみ上がる

絹代 （視線は宙をさまよいながらも熱く）「夜の真昼とはあなたの事、夜の翼に羽を休めるあなたは鴉からすの背に降りかかる雪よりも白いだろう。さあ、優しい夜、早く来ておくれ、いとしい、暗い夜、私のロミオをおよこし、ロミオが死んだら返してあげよう、細かく刻んであの夜空の星にするがいい、そうすれば、夜空は一段と美しくなり、誰も彼も夜を愛して、ぎらつく太陽など拝まぬようになろう」

江美 お客様！ おわかりですか？ お客様は「山田絹代」様というお名前
で……。

絹代 「その事はもう何もおっしゃらないでくださいませ……」

江美 くださいませとおっしゃられても……。

千夏 記憶喪失よりもワンランク上の大変なことになってるんじゃない？

絹代 「もう夜が明ける。帰って頂かねばなりません、でも遠くまでは離したくない、あの悪戯娘いたずらに飼われている小鳥のように、手放したと思うのも束の間で、糸の鎖に繋がれた囚人よろしく、絹の糸で手繰り寄せ、自由を奪ってしまいたい」

早苗 あーダメダメ。そういうの一番嫌われるんですよ。男はね、自分を縛り付ける女なんて鬱陶うっとうしいの。あたしもそれで何回失敗したことか。

亜紀 今はあなたの失敗談語ってる時じゃ……。

スマイレ （亜紀たちに）ご挨拶が遅くなりました。女将の門田かじたスマイレでございます。
います。

亜紀 そうですか。あなたが……。

スマイレ お騒がせいたしましたして申し訳ございません。どうぞお部屋でごゆっくりおくつろぎくださいませ。

千夏 （絹代の様子を興味深く伺いながら）くつろげって言われてもねえ……。

絹代 （誰の言葉にも耳を貸すことなく、自分の世界に酔いしれたまま）「お、優しいロミオ、愛しておいでなら、そうとはっきりおっしゃって」

早苗 そういうのもダメなんだって！「いつからあたしのこと好きだった？」なんて訊いた途端に、男は引くんだから！

亜紀 部屋に戻ろうよ、早苗。

早苗 だってこんなにのぼせ上がってたら、絶対あとで泣きを見ると思わない？

亜紀 そういう問題じゃないよ。空気読みなって！

スマイレ 紀子さん。（と目配せする）

紀子 （さりげなく三人を追いたてながら）さーて。お布団のご用意をいたしまししょうね。

早苗 （追い出されながらも絹代に）恋愛はね、駆け引きよ！ 溺れたら負け！

千夏 振られたばかりのくせによく言うよ。

早苗 振られたって言わないでよ！

紀子 みなさま、露天風呂にはもうお入りですか？ その際はお足元に充分お気をつけくださいませね。

紀子と女三人は退場。

スマイレ 江美ちゃん、山田様をお連れして。

江美（絹代を促しながら）さあ、山田様。もう少しお休みください。

絹代（連れて行かれながらぶつぶつと）「知らずにお会いしたのが早過ぎて、知った時にはもう遅過ぎる……。産声をあげた時からすでに不吉な恋……」

江美と絹代、退場。

それを不安そうに見送るスマレとユリエ。

スマレ ……（ため息）お医者様に電話してくるわ。

スマレ、退場。

ぽつんと一人残されたユリエ、ぼんやりと絹代の言葉を食^はみ返す。

ユリエ ……「知った時には、もう遅過ぎる……。産声をあげた時から……不

吉な恋……」

ユリエ、そのままもの思いにふけた様子で、月明かりの下にさまよ
い出る。

ユリエ（月に向かって）「おお、ロミオ、ロミオ、なぜあなたは……トミオ
なの？」……（寂しげに）なーんちゃって……。

トミオ（暗闇の中から突然、姿を現し）父がトミオとつけたからです。さ
つきお教えしたはずですが。

ユリエ（腰が抜けそうなほど驚いて）トミオさん!?

トミオ（嬉しそうに）初めて名前を呼んでくれましたね。

ユリエ どうして……?

トミオ 言ったでしょう？「必ずまた」って。

ユリエ だからってこんな時間に……（慌てて辺りを伺いながら）江美ちゃ
んに見つかったらひどい目にあいますよ？ 彼女、ああ見えて合気道の有

段者なんですから！

トミオ ケーキを四十個食べる女性より、僕にはあなたの方が遥はるかに恐ろしいです。ほら、そんな怯えた目で見ないでください。それとも、さつき言ってくれたことは嘘ですか？

ユリエ さつきって？

トミオ あなたも僕のが好きだって。

ユリエ そんなこと言っていない。

トミオ 記憶力がいいんですね。確かに口ではおっしゃらなかった。でも、ことわざにもあるでしょう？「目は口ほどにものを言う」って。

ユリエ そうですけど……。

トミオ (ユリエの手をとり)「目に入れても痒くない」とも。

ユリエ (そつとその手から逃れ)それを言うなら「痛くない」では？

トミオ 失礼。海外生活が長かったもので……だから知らなかったんです。うちのホテルが、あなたがたを苦しめていたなんて。

ユリエ お聞きになったんですね……。

トミオ でも僕の気持ちに変わりはありません。(夜空を仰ぎ見て)あの月にかけて誓ってもいい！

部屋の窓がひとつ開き、そこから絹代が顔を出す。

絹代 「いえ、月では駄目！ 絶えず満ち欠けを繰返すあの不実な月のように、あなたの恋がひと月毎に変わるかもしれない」

トミオ (それが絹代の声とは気づかず)では何にかけて誓いましょう？

ユリエ あの……。

絹代 「いえ、お誓いにならないで。お会いできたのは嬉しい、でも今宵ここでのお約束は嬉しいとは思いません。余り軽はずみで、無分別で、唐突で、光ったと言いつつ終わらぬ先に消えてしまう稲妻のように」

トミオ (黙って背中であらわしていたが、向き直り)稲妻、結構じゃないです

か！ この激しい思いは稲妻にだって負けません！

ユリエ 今のは私じゃありません！

トミオ は？

ユリエ (窓辺に江美が姿を現したのに気づいて慌てて) 隠れて！

ユリエとトミオ、その場にしゃがみこむ。

江美 夜風はお体に毒ですよ？ 窓はお閉めしましょうね。

絹代 (ハツと) 「中で何やら声が。(あらぬ方向に) 直ぐに、ばあや！」

江美 ……あたし、まだ二十三なんですけど。(窓を閉める)

トミオ ……なんですか？ 今のは。

ユリエ ちょっとお加減を悪くされたお客様がいらして……。

トミオ それは僕も同じです。あなたに会ってからというもの、苦しくて夜

も眠れない。

ユリエ 今日の昼にお会いしたばかりですし……。

トミオ ユリエさん。

ユリエ はい。

トミオ ……昼間のように、もう一度言ってください。

ユリエ なんて？

トミオ 「さあ、どうぞ」って。

ユリエ ……(心を決めて)「さあ、どうぞ」……。

トミオ、ユリエを抱き寄せる。

二人とも小さくしゃがんだままなので、とても抱き合いにくそう。
ダンゴ虫のように抱き合う二人を、いつのまにか別の窓から千夏
が眺めている。

千夏 うーん、面白い。確かにここはいい旅館だよ。

翌日。

亜紀、千夏、早苗の三人が町なかを歩いている。

亜紀 あこの山田さんて人、これからどうするんだろう。今朝も「ロミオはどこ？」ってやってたよね。

千夏 それでさ、「目に入れても痒くない」とか言っちゃってるんだよ。

早苗 (ガイドブックを見ながら) 大理石風呂にミストサウナだって。ボーリング場にビアガーデンまであるよ。あたしたちもトミオ君のホテルに泊まった方がよかったんじゃない？

亜紀 なんでジュリエットなのかなあ。

千夏 でね、最後にはダンゴ虫みたいにいつまでも二人で抱き合ってるの！可愛いと思わない？

亜紀 それをこっそり覗いてたわけ？ いやらしいなあ。ほんとおっさんだね、千夏。

早苗 ねえ、早くしないとケーキバイキング終わっちゃうよ？

千夏 お！噂をすれば恋する青年が！

トミオと紀子が言い合いをしながら現れる。

紀子 ですからね、遊び半分だったらやめてくださいって言ってるんです。

トミオ 僕は真剣だって言ってるじゃないですか。何度言ったらわかってもらえるんです？

紀子 ユリエさんはね、男の前では科しなをつくって、陰で大酒かつ食らうような最近のお嬢さんたちとは訳が違うんです。

千夏 耳が痛いねえ、早苗ちゃん。

紀子 小さい頃からそりやあ素直で可愛くてね。とにかく純粋なんですよ。

トミオ (うっとり) あの綺麗な目を見ればわかります。

紀子 ユリエさんのように女らしくて素敵な方は、今どき日本中どこを探してもっていませんよ。特別天然記念物みたいな人なんです。トキや、イリオモテヤマネコとおんなじ！ 貴重なんです。

トミオ わかります！ ユリエさんはすききったこの日本にただ一人残された本物の大和撫子、絶滅危惧種なんだ！ 僕がこの手で守ってあげなくては！

早苗 はい、そこで日本中の現代女性を敵に回しているお坊ちやま。

トミオ (三人に気づいて) ああ、こんにちは。

早苗 あのねえ、すききった世の中で一人でがんばってる女の方がよっぽど健けなげ気だつてことがわかんないかなあ。誰かに守ってもらいたいなんて甘い考えじゃ、仕事なんてやっていけないでしょう？ 特別天然記念物だからなんだか知らないけど、そういうできない子たちと働くこっちの身にもなつてごらんよ。(突然、腹が立ってきて) 第一、あれは天然じゃない！ 計算けずりくだつてことがなんで見抜けないの！

紀子 ユリエさんはそんなざる賢い人じゃありません！

亜紀 違う人のことを言ってるんです。なにかイヤなことを思い出したみたいで。

トミオ あなたたちからも説得してください。僕は必ずユリエさんを幸せにしてみせますから。

早苗 説得したら結婚してくれる？

トミオ もちろんです。結婚します。僕の花嫁はユリエさん以外考えられない。

紀子 そんなことスマレさんが許すはずありませんよ。

巫紀 (トミオに) 気持ちはわかるけど、あんまり慌てない方がいいんじゃない?
ない?

千夏 なんて? 話は急展開した方が面白いよ。

巫紀 だって二人とも会ったばかりだし、周りはみんな反対してるんですよ?
よ?

千夏 (トミオの肩をたたき) だからこそ盛り上げるんだよな?

トミオ 仕方ないじゃないですか。いきなり運命の人と出会ってしまったんですから。(思いつめて) こうなったら一日も早く結婚しないと……。

早苗 (一人で勝手に反省しながら) やっぱり結婚は勢いなんだよねえ……。

まずは籍を入れちゃうべきだったなあ……。

紀子 そもそもユリエさんには、もうお見合いの話が決まってるんですよ。

千夏 (たまらなく楽しそうに) そうなんだあ!

紀子 お相手の方はハンサムだし、お金持ちだし……まあ、その点はあなたも負けてはいないでしょうけど。

トミオ だったらなおさら急がなくては!

巫紀 いや、そうじゃないと思うよ? お互いきちんと家族とも話し合ってから……。

トミオ そうだ! 結婚だ!

巫紀 トミオ君……人の話全然聞かないんだね。

トミオ この辺りに教会はありませんか?

早苗 (ガイドブックを見て) チャペルならひとつあったよ? ……ああ、これトミオ君とこのホテルの中だ。

千夏 (ガイドブックを奪い取り) ここがいいよ、森中神社! 縁結びの神

様だつて!

トミオ (紀子に) ユリエさんに伝えてください。今夜十時に、森中神社で二人きりの結婚式を挙げようって。必ず伝えてくださいね! (財布からなにやら取り出しながら) 少しですが、これは僕の気持ちです。

紀子 いただけませんよ、そんなお金なんて。

トミオ　うちのビアガーデンのビール無料券です。

紀子　（券をしまいながら）お金じゃないならいただいておきますけどね。
約束ですよ？　ユリエさんを泣かせたりしませんね？

トミオ　（力強く頷き）たとえ僕が泣かされるようなことがあっても。

千夏　（トミオに）ねえ、あたしたちも今夜、行っている？　結婚式の証人
になってあげるからさ。

トミオ　是非お願いします！

早苗　ご祝儀持っていなくてもいいかなあ。

トミオ　もちろんですよ。僕たちの門出を祝ってくれるならそれだけで。（亜

紀たち三人にも無料券を渡し）あ、どうぞ、みなさんもよろしければ。

千夏　やったあ！　ただ酒だあ！

紀子　（帰っていきながら）スマレさんにバレなきやいいですけどねえ……。

（退場）

トミオ　くれぐれもよろしく！　（三人に）それでは今夜十時に。（興奮気味
に退場）

千夏　さて！　行くか！

早苗　そうだよ。ケーキバイキング終わっちゃう。

千夏　なに言ってるの？　旅館に戻るんだよ。

亜紀　なんで？

千夏　結婚を申し込まれた瞬間の若い女の子の顔が見たくないの？（紀子の
去って行った方へ）仲居さん！　待ってー！（と追いかけて行く）

早苗　……千夏ってほんとにさあ……。

亜紀　いいよ、その先はもう言わなくて。

早苗と亜紀、退場。

雲雀旅館のロビー。

疲れ切った様子のスマイレが現れる。

そこへユリエが登場。

ユリエ どう？ 山田様のご様子は。

スマイレ 今は舞踏会にお出になってるみたいね。一人で口づけの儀式を楽しんでらっしゃるわ。

ユリエ やっぱり女優さんなのかしら？

スマイレ だとしたら役になりきるのは舞台の上だけにしていただきたいわね。本当に一時的なものなのかしら。明後日^{あさって}までには治っていたかかないと困っちゃう。

ユリエ ……明後日になにかあるの？

スマイレ (驚いて) あなたのお見合いじゃない！ 忘れたわけじゃないでしょうね？

ユリエ そんな急だなんて聞いてない。

スマイレ 言わなかったっけ？ 紀子さんがごちやごちや口をはさむから言いそびれたんだわ。着ていく物はもう決まった？

ユリエ あのね、お姉さん……。

スマイレ お着物を着せたいところだけれど、こう暑いと化粧崩れが心配ね。

ユリエ 私、やっぱり……。

スマイレ 去年買ったワンピースがあったじゃない。あれがいいわ。二歳は若く見える。

ユリエ 旅館が大変なのはわかってるの、でも……。

スマイレ 美容院に予約しておきなさいね。当日じゃバタバタしちゃうから明日の方がいいでしょう。

ユリエ お姉さん！ 私……！

スマイレ (静かに厳しく) 好きな人ができたなんて言わないでよ？

ユリエ (うつむいて) ……好きな人ができたの……急なんだけど……。

スマレ (大きいため息をつき) ユリエ……。あたしと午平さんが結婚した時のこと、覚えてる？

ユリエ ……お義兄^{にい}さん、まだ帰って来ないの？

スマレ どの面^{つら}下げて帰ってくるっていうの？ あの人はね、「一生、君だけを愛し続ける」って言ったの。お父さんもお母さんも、その言葉を信じてようやく結婚を許してくれた。なのにどう？ あれから十五年も経たないうちに、女を作って出ていったのよ？

ユリエ お姉さんが追い出したんじゃない。あんなに謝ってたのに。

スマレ 結局あたしには男を見る目がなかった。ねえ、ユリエ。あなたも多分同じ。あたしの妹なんだから、ろくでもない男を好きになるに決まっている。

ユリエ トミオさんはそんな人じゃ……。

スマレ トミオとユリエ？ まるでロミオとジュリエットね。悲劇のヒロインは山田様お一人でもう充分。あたしはあなたに幸せになってほしいの。あたしのように、不幸な結婚はしてほしくないのよ。

そこへ困り顔の江美が現れる。

江美 女将さん、山田様が……。

スマレ 今度はなに？

江美 大声で泣いてらっしゃいます。「テイボルトさん」て方がロミオに殺されたとか何とかで。

スマレ (うんざりと) 今、行くわ。(ユリエに) 早く美容院に電話しなさい。

なにか言いたげなユリエに構わず、スマレ、退場。

取り残されて沈んでいるユリエに、江美がそつと声を掛ける。

江美 ……お見合い、もうすぐですね。

ユリエ 私ね、江美ちゃん……。

江美 有栖川先輩はいい人ですよ。

ユリエ ……知り合いなの？

江美 高校の先輩なんです。頭も顔も性格もいいから、学生時代からすごくモテたんですよ。でも気づいたところなんか全然なくて……というか、あれは自分がいい男だっという自覚がないんですね。女の子達にいくら言い寄られても、不思議そうに困った顔をしていましたから。だからきつと午平さんみたいに浮気したりなんかしませんよ。

ユリエ 江美ちゃんまでそんなこと言わないで。

江美 本当にいい人なんですよ。欠点といえば、ド近眼なことくらい。……もしかしたら、ユリエさんが初恋の人なのかもしれないですね。ユリエさんは知らないでしょうけど、去年の夏祭りの時、先輩、遠くからじーっとユリエさんのこと見てたんですよ。分厚い眼鏡かけて。シミひとつないきれいなほっぺた真っ赤に染めながら、ぽかーんと口を開けて……。あんなに間抜けな先輩の顔、初めて見ました。あたし、すぐにわかったんです。ああ、きつと先輩は、ユリエさんのことが好きになっちゃったんだなあ……。

ユリエ (どこか寂しそうな様子の江美に) 江美ちゃん、もしかしたらその人のこと……。

江美 ……あたし、面食いなんです。

ユリエ ……え？

江美 顔さえ良ければ家柄や性格なんてどうでもいいんです。残念ながら先輩には他にもいろいろ条件が備わっちゃってたから、競争率がものすごく高くって。でも、あんなに綺麗な顔の男の人、二度とめぐり遇えないだろうし、勇気を出して告白してはみたんですけど……。

ユリエ ……断られちゃったのね……。

江美 ええ……。三回とも。

ユリエ ……三回も告白したの？

江美 だって、マツチ棒が三本は乗りそうな長い睫毛で、近眼のせいなん
でしようけど、目なんてキラキラしちゃって、見ているだけでイヤなこと
みんな忘れられそうな美しさなんです！ あの顔見たさに先輩のいた合気
道部に入ったんですけど、先輩、幽霊部員だったみたいで……。そうとは
知らずに、あたし、せっせと部活に励んでどんどん強くなっちゃって、最
後には県大会で優勝までしてしまっ……。

ユリエ 知らなかった。江美ちゃんの強さの裏側に、そんな悲しい思い出が
あったなんて。

江美 (我に返り) あたしのことなんてどうでもいいんですよ。ユリエさん
はきつと幸せになれるって話です。

ユリエ そんな話を聞いちゃったら、余計お見合いなんてできない……。

江美 (慌てて) だったら忘れてください。

ユリエ ……私もね、好きな人がいるの。

江美 ……キャピュトーレホテルの息子ですか？

ユリエ ……。

江美 確かにあの顔も悪くありません。でも先輩の笑顔にはかないませんよ。
ユリエ 私は別に面食いじゃないから……。

江美 あの笑顔は最高なんです。だから……どうか先輩に、笑顔でいさせて
あげてください。

ユリエ ……。

江美 お願いします……。

ユリエ 江美ちゃん……。

そこへ紀子と亜紀たち三人が帰ってくる。

紀子 ユリエさん。最高のニュースをお持ちしましたよ。スマレさんにとつ
ては悪夢のようなお話でしょうけど。

千夏 待つて待つて！ あたしに言わせて！（もったいぶって）あのね、あなたの愛しいトミオ君がね……。

早苗 今夜、二人で結婚式を挙げようって。

千夏 ああ！ せっかくの楽しみを！

ユリエ 今夜って……今日の夜？

紀子 今日の夜のことをね、今夜って言うんですよ？ 恋する女の子は日本語も忘れちゃうんですか？

江美 ふざけないでください。明後日にはお見合いなんですよ？

亜紀 それを聞いて余計火がついちやったみたいなんですよね。

千夏 （ユリエの手を取り）「今夜十時に、森中神社で二人だけの結婚式を挙げよう」。あ！ あたしたちも証人として参加させてもらうからね？

ユリエ 本当にトミオさんが？

江美 どういうつもりなんですか？ 紀子さん！ 相手はあのホテルの人間なんですよ？

紀子 そりやそうだけど、やっぱり結婚は好きな人とするのが一番でしょう？

早苗 そうそう。好きな人と勢いするのが一番。

江美 玉の輿だつてあんなにはしゃいでたのに……。

紀子 ホテルの御曹司おんぞうしだつて充分玉の輿じゃないの。

江美 ……さてはなにか貰いましたね。

千夏 お！ 鋭いね！

紀子 失礼なこと言わないでちょうだい。（ユリエに）確かにお伝えしましたからね。あー暑い暑い。ビールといきたい所だけれど、麦茶で我慢しようつと。（退場）

早苗 じゃあ本番に備えて、今からリハーサルしところか！

千夏 賛成賛成！

亜紀 大丈夫なのかなあ。なーんかイヤな予感がするんだよねえ。

千夏 景気の悪いこと言うなつて。

早苗 行こう、ユリエさん。

ユリエ (早苗と千夏にほとんど連行されながら) 江美ちゃん、ごめんね！

ユリエと女三人、退場。

一人残された江美、複雑な表情のままやがて退場。

6

同じ日の夕方。

雲雀旅館の庭先で、スマイレの夫・午平が、中の様子を恐る恐る伺っている。

そこへ背後から絹代が姿を現す。

絹代 (午平の姿を見とめて驚いた様子で) 「どなたの手引きでここへ？」

午平 (度肝を抜かれ) どわあ！

絹代 「どうしてここまで？ 話して、何のために？」

午平 こちらにお泊りのお客様ですか？ あの、決して怪しい者ではないんです。そうだ、名刺を……。 (とポケットから名刺を取り出して絹代に渡し) もともとはこの旅館の主人なんですが……。今、ちよつと事情がございまして……。

絹代 (渡された名刺をじっと見て) モンタ……。ギユウヘイ？

午平 いやいや、「カドタゴヘイ」です。「モン」じゃなくて「カド」。それからこれは午前午後の「ゴ」ですよ。「牛」じゃなくて「午」。私、午年の生まれなもので。

絹代 「困ります、ここで見つかりでもしたら」

午平 ……私が追い出された経緯いきさつをご存じなんですね？

絹代 「見付かれば殺されましょう」

午平 (怯えて) スミレはまだそんなに怒っているんですか？

絹代 「幾ら誓って頂いても、それが嘘でないとは言えない……」

午平 本当に終わったことなんです！ でもそうか……まだ許してくれそうにはないか……。

「山田様——！」と呼ぶスミレの声。

絹代 「今、行きます！（午平に）お休みなさいまし、もういらして！」

午平 分かりました。出直して来ます。

午平、慌ただしく退場。

入れ替わりにスミレが現れる。

スミレ こんなところにいらしたんですか？ さあ、お部屋に戻ってお休みください。

絹代 「もうお帰りになるの？ まだ朝にならない。あれは夜鳴鶯ナイチンゲール、雲雀ではありませぬ」

スミレ お客様がお泊りなのは雲雀旅館でございますよ？

絹代 「いえ、朝よ！ 早くお帰りになって！、早く！」

スミレ そうですね。帰りましょう。今は夕方ですけれど。

絹代 「あの調子はずれに歌っているのは雲雀、あの聞き苦しい不愉快な金切り声は。雲雀は色々変わった音色を弾き分けるという、でも、あの雲雀は駄目、私たちを引き分けてしまうだけ。雲雀は忌まわしいひきがえる蟪蛄と目を取り替えっこしたとか、ああ、ついでに声も取り替えてしまえばよかったのに」

スミレ 雲雀の悪口はそれくらいでよろしゅうございますか？ 間もなくお夕食のご用意ができますからね。

絹代 「ああ、だんだん明るくなってくる！」

スマイレ ……私の心は暗くなってきました……。

スマイレ、絹代を連れて退場。

スマイレの言葉に従うように、辺りがだんだん暗くなってゆく。

7

同じ日の夜の森中神社。

やや不安そうなユリエを先頭に、亜紀、千夏、早苗が現れる。

千夏 ほら、早苗。もたもたしない！

早苗 だってやぶ蚊がすごいんだもん。

亜紀 ユリエさん、虫除けスプレーしといた方がいいよ。(ユリエにせつせとスプレーをかける)

早苗 あ！ あたしにも！

亜紀 花嫁さんが先でしょう？

ユリエ ……本当にいいんでしょうか？

亜紀 大丈夫。これ、無香料タイプだから。

ユリエ お姉さんに内緒で結婚なんて……。

千夏 いいんじゃないの？ もう子供じゃないんだから。

ユリエ よく考えたら、トミオさんとは昨日、お会いしたばかりだし……。

早苗 よく考えてたら結婚なんて一生できないよ？ ユリエさん、マリッジ

ブルーなんじゃないの？ 贅沢だよ。プロポーズされといて不安になるなんて。

ユリエ そう言えば、みなさんのご結婚なさってらっしゃるんですか？

三人、それぞれの思いで無言。

ユリエ ごめんなさい。聞いてはいけないことを聞いてしまったみたいで……。

千夏 別に結婚しないのは犯罪じゃないからね。

早苗 いっそ法律で義務付けてくれればいいのに。

千夏 税金でお見合いパーティーでも開けての？ やめてよー。みんながみんなあんたみたいに結婚したいわけじゃないんだからさ。

亜紀 (ユリエに) 迷ってるんならやめた方がいい。

早苗 ……どしたの？ 亜紀。

亜紀 彼と一緒にになれる嬉しさより、不安の方が勝^かってるんだったらやめた方がいいよ。ましてあなたたちは誰からも祝福されていないでしょう？

千夏 あたしたちが祝福してるじゃん。

亜紀 無責任に祝ってるだけだよ。にわか応援団は二、三日もすればいなくなる。周りにはあなたたちのことをよくは思ってくれない。それでも耐えられる？

早苗 耐えられるよねえ？ 愛さえあれば。

亜紀 お姉さんや相手の家族に迷惑をかけて、悲しませることになるんだよ？ それだけの覚悟があるの？

ユリエ 姉を悲しませるのは……イヤです……。

早苗 お姉さんのために運命の恋をあきらめるの？ そんなのおかしいよ。

亜紀 運命でも偶然でも、恋なんて始めるのは簡単なの。だけど、終わらせる時にはそうはいかない。

千夏 終わらせようと思って恋し始める人なんていなくない？

亜紀 ……そうかな……。

早苗 (ユリエに) 亜紀はねえ、心配性なの。今回の旅行だってすごい大荷物で来たんだよ？ 旅行代理店に勤めてるくせに。

亜紀 あたしはただ！……取り返しつかないことにならなければいいなって……。

ユリエ 私、やっぱり……！

奥からトミオが姿を現す。

トミオ 来てくれたんですね！

ユリエ (一転、頬を輝かせ) トミオさん！(と駆け寄って行く)

亜紀 (疲労の色を隠せず) ……いいんだけどね……。本人がそれでいいんなら……。

トミオ 十時にと言ったことを後悔していました。待ちきれなくて。

ユリエ 本当にいいんですか？ 結婚なんて……。私なんか、なんの取り柄もないのに。

トミオ そんな言い方はやめてください。ユリエさんのことを悪く言う人は、例え本人でも僕が許しません。……ああ、でも許しちゃいそうだ。本人だから。

千夏 色ボケはそれくらいにして、とつとつ式を挙げちゃおうよ。これ以上やぶ蚊を太らせることないって。ではこれより……。

早苗 あたしにやらせて！ (咳払いして)では。たくかくさくごくやく(と、謡曲「高砂」をぶち始める)

亜紀 (呆れて)なにやってんの？

早苗 結婚式には「高砂」でしょ？

亜紀 それ、披露宴で親戚のおじいちゃんとかが謡う奴でしょ？

ユリエ あの……簡単に誓いの言葉だけ言わせてもらえれば……。

千夏 ダメダメ。神前式にはまず祝詞だよ。

早苗 そんなの知らないもん。

千夏 まかせときなつて。

亜紀 そういえば千夏、神主さんの親戚がいたっけ。

千夏 (神妙に)よろしいですか？ では、祝詞奏上。(かなり本格的に)「掛けまくもかしこき森中神社の大前に、かしこみかしこみもおおまかしく、風の音

の遠き神代かみよの昔むかし、伊邪那岐伊邪那美いざなぎいざなみ二柱神ふたはしらのかみの興おこし給たまひ創はじめ給たまひし婚姻とつぎの道みちに神習かむならいひ奉りて……」

巫紀 (祝詞を聞きながら) 意外な技を隠し持ってたね。

早苗 ただのおっさんじゃなかったんだ。

千夏 「此度こたびトミオとユリエい、巫紀、早苗、千夏を媒介人なかたちびととして礼式みやわぎ厳しく美うるわしく執り行はむと、八十日やそかび日は有れども今日いづくひを生たるひの足日いはひと齋定いはひめて……」

トミオ …… (不安げに巫紀たちに) それで、これはいつまで続くんでしょ
う？

巫紀 さあ……。

そこへものすごい形相のスマレが姿を現す。

スマレ ユリエ！ なにバカなことやってるの！

ユリエ お姉さん！

早苗 千夏く！ あんたが長々と祝詞なんてやってるからく！

スマレ お客様も悪ふざけは大概にしてください！ (ユリエの手を強引に引
っ張り) 帰るわよ！ よくもこんな恥をかかせてくれて！

トミオ 待ってください！

スマレ (頭の天辺からつま先までトミオを眺めて) あなたがトミオさん？
トミオ 話を聞いてください、お姉さん、僕たちは……。

スマレ あなたにお姉さんなんて呼ばれる筋合いはありません！

トミオ では、スマレさん。

スマレ 話す必要なんてないって言ってるんです！ あのホテルの次期社長
さんだそうですね。世間知らずの妹をたらしこんで、オンボロ旅館の乗っ
取りでもお考えですか？

ユリエ ひどい、お姉さん！ トミオさんはそんな……。

スマレ 騙されてるのよ！ どうしてわからないの！

トミオ　うちのホテルは関係ありません！　お願いです！　ユリエさんとの結婚を認めてください！　ユリエさんがいなければ、僕は一秒たりとも生きていられない！

スマレ　だったら死んでください。

トミオ　そうきましたか……。

スマレ　妹には、有栖川先生のご長男という立派な結婚相手がもう決まっています。

ユリエ　私、ド近眼のマネキン人形なんかと結婚したくない！

スマレ　頭を冷やさない！　こんな夜中にこそこそと、猫の集会じゃあるまいし。お天道様に顔向けできないような真似して、恥ずかしいと思わないの？　お父さんたちが生きていたらなんて言うか！

ユリエ　きつと許してくれたわよ！　お姉さんとお義兄さんの結婚だって認めてくれたじゃない！

スマレ　浮気するような男だって知らなかったからよ！

トミオ　僕は浮気なんてしません！

スマレ　（ユリエに）聞いたでしょ？　あの人とまったく同じ。上辺うわべだけの言葉を並べ立てる男なの！

トミオ　僕はあなたのご主人じゃない！

スマレ　当たり前でしょう！　あなたと私がいつ結婚したって言うの？
トミオ　そういう意味ではなくて……。

亜紀　トミオ君の言うとおりですよ。彼はあなたのご主人とは違う。妹さんだって、あなたとは違う人間です。彼がこの先、他の人を好きになるようなことがあっても、それをどう受けとめるかはユリエさんが決めることです。

ユリエ　例えそんなことになっても、私、後悔しないから！

トミオ　どうしてみなさんは寄ってたかって僕を浮気者にしたがるんですか？

スマレ　（亜紀に）自立なさっている方のご立派なご意見ですね。ですがこ

の子は世の中のことなんてまったくわかっていないんです。姉としては妹がみすみす不幸になるのを黙って見ているわけにはいきません。

亜紀 なにもかもを自分の思い通りにしようとするあなたのそういう態度に、ご主人も息苦しさを感じられたのでは？

早苗 よしなよ、亜紀。今夜の宿がなくなる！

スマレ (一瞬、亜紀を厳しい表情で見つめていたが、すぐに冷静さを取り戻し) 間もなく露天風呂のご利用時間が終了となります。どうぞ、宿の方へお戻りくださいませ。(ユリエの腕を引っ張り) あなたも帰るのよ！

トミオ 待ってください！

スマレ (厳しくトミオを一瞥し) 二度と私たちの前に現れないで！

ユリエ (連れていかれながら) トミオさん！

スマレとユリエ、退場。

早苗 (手や足を掻きむしりながら) 蚊に食われ損だよ……。

トミオ (二人の去った方を呆然と見送り) ユリエさん……。

早苗 もう。亜紀が火に油を注ぐようなこと言うから。なんなの？ 最初は反対してたくせに。

亜紀 別に……。ユリエさん、気の毒だったから。

千夏 しかし、なんでバレたのかな？

早苗 そりゃあ、密告者がいたんじゃない？

千夏 ああ、いたねえ、一人協力的じゃなかった人が。

トミオ (魂を抜かれたように) ユリエさん……。

そんなトミオを、三人が哀れみの目で見つめる中、暗転。

一筋の光の中に、絹代が一人立っている。

絹代 「おお、ロミオ、ロミオ！ なぜあなたはロミオなの？ お父上に背き、その名を捨てておくれ、さもなければ、それが出来ぬのなら、せめて愛の誓いを、そうしてくれさえしたらもうこの身はキャレットではない。私の敵はあなたの名前だけ。モンタギューでなくても、あなたは矢張りあなたなのだもの。ああ、名前を変えて！ モンタギューが何だと言うの？ 手でもない、足でもない、腕でも顔でもない、生れ付き人の身に備わっているようなものとは違う。名前に何があると言うの？ 薔薇の花を別の名前と呼んでみても甘い香りを失せはしない。ロミオとて同じ事、ロミオと呼ばれなくても、その完全無欠のお人柄は名前を離れて残ろうものを」

紀子が現れ、無言のまま絹代の手を引いて連れて行く。

絹代 （連れて行かれながら）「ロミオ、名前を捨てて。身に備わったものならぬその名の代りに、受けておくれ、この身のすべてを！」

紀子と絹代、退場。

9

翌日。

雲雀旅館内のユリエの部屋。

江美とユリエ、亜紀と早苗と千夏が神妙な顔で膝を突き合わせている。

千夏 明日のお見合いまで外出禁止か……。封建的だね、お宅のお姉さんも。

早苗 (江美に) 黙ってないでなんとか言ったら？

ユリエ 江美ちゃんを責めないでください。

早苗 ユリエさん、人がよすぎるんじゃない？ (江美に) あなたも年頃のお嬢さんなんだから、恋する女の気持ちくらいわかってよさそうなおんどりだ。

ユリエ 違うんです、江美ちゃんは……。

早苗 女将さんに忠誠を尽くすその態度は立派だと思っただけだ。でも、馬に蹴られて死んじゃうよ？ 言うよね？ 「人の恋路を邪魔する奴は」って。

ユリエ そうじゃなくて、江美ちゃんは……。

早苗 大体さあ……。

亜紀 話、聞いてあげなよ。

江美 だって……先輩が可哀相で……。

千夏 先輩って？

ユリエ 私の、お見合いの……。

江美 お見合いの相手に逃げられたなんて噂は、こんな田舎町じゃ、あつと
いう間に広まります。先輩は笑い者になってしまっ……。

千夏 (深刻に頷きながら) あたしも多分、笑うと思う。

江美 そんなの耐えられません。

亜紀 その先輩のこと、好きなんだ。

早苗 だったらあなたが結婚すればいいじゃない。

江美 それができたらどんなにいいか……。

早苗 アタックしてみたら？ ダメもとで。

江美 ダメでした。五回とも。

ユリエ この間は三回って……。

江美 ちょっとサバを読んだんです……。

ユリエ そう……。

千夏 そこまでしつこく好きなくせに、なんでユリエさんと結婚させたいの？

江美 ……それが、あの人の望みだからです……。

亜紀 あなたの望みじゃないよね？

江美 先輩が幸せになることが、あたしの望みです……。

千夏 無償の愛か……。泣かせるね。

江美 ……仕事に戻ります。

江美、一礼して退場。

早苗 ……こうなったら駆け落ちだね。

ユリエ え？

早苗 逃げ出すしかないよ。縄梯子とかないの？

千夏 どうせ逃げ出すならお見合いの後にすれば？ その方が敵も油断するだろう。

ユリエ でも、今の江美ちゃん見てたら……。

千夏 他に好きな男がいる嫁さんなんか貰って、先輩は幸せか？

早苗 そうそう。みんなで仲良く不幸になることなんてないない。

千夏 誰かの犠牲になって生きるなんてつまらないぞ？

早苗 そうだよ。

千夏 まあ、美しい行為とも言うけど。

早苗 どっちなのよ。

ユリエ 私……どうしたら……。

亜紀 あなたが決めるんだよ、ユリエさん。

早苗 あたしが決めてあげてもいいけどね。

亜紀 トミオ君を選んでも選ばなくても、あなたは苦しむことになる。だから自分で決めるしかないんだよ。

ユリエ 私は……。

その時、遠くから「スマレさん！」と繰り返し呼ぶトミオの声と、「無

茶はやめてください！」と、それを制する紀子の声が聞こえる。

ユリエ トミオさん？

早苗 ……なんか名前、間違えてない？

千夏 行ってみよう！

早苗と千夏が飛び出していった後を、亜紀が追う。

10

しがみつく紀子を引きずるようにしてトミオが現れる。

トミオ スミレさん！ スミレお姉さん！

紀子 やめてください！ 気でも違ったんですか！

トミオ スミレさんに会わせてください！

紀子 会ったら最後、殺されちゃいますよ！

そこへスミレが現れる。

スミレ 二度と私たちの前に現れるなど申し上げたはずですが？

トミオ お願いです。ユリエさんとの仲を認めてください。うちのホテルが

気に入らないというなら、僕は家を捨てます。婿養子に入ります。雲雀旅

館のためになんでもします。下働きでもなんでも、お姉さんの肩もみだつ

て……！

スミレ (ため息) ……そんなことをしたら、どうなると思います？

トミオ 肩がほぐれるのではないかと思いますが……。

紀子 スミレさんは肩が凝らない体質なんです。

スマイレ 「雲雀旅館は有栖川さんとの縁談を蹴って、ライバルホテルの次期社長を婿養子に迎え入れた。まるで下男げなんのようにこき使うために……」そんな評判を立てられたら、うちはおしまいなんですよ！ あなたもカピトルホテルの跡取りなら、なぜ、それくらいのこと……。

トミオ 「カピトル」ではなく、「キャピュトール」です。

スマイレ 言いにくいのよ！

トミオ 僕は好きこの好んでホテルの息子に生まれたわけじゃありません。

紀子 なにを言っても無駄ですよ。この町からあのホテルを撤退させてくれるとでも言うなら、話は別でしょうけれど。

トミオ 父に掛け合ってみます！

スマイレ 思いあがるのもいい加減にしない！

トミオ ……スマイレさん。

スマイレ 馴れ馴れしく呼ばないで！

トミオ 愛らしい花の名前だ。

紀子 女将さんはそんな手に引かかるほどウブじゃありませんよ。

トミオ こんなふうにも、熱い思いを込めて、かつてあなたを呼んだ人はいませんでしたか？

スマイレ ……お引取りください。

トミオ その人と一緒にいられるなら、すべてを捨ててもいいと思ったことはありませんか？

紀子 それがあるんですよ、こう見えてもスマイレさんは……。

スマイレ 紀子さん！ とつとつその男をつまみ出して！

トミオ わかってください！ 僕はユリエさんが……！

スマイレ こんな小さな温泉街にあんな大きなリゾートホテルを建てて、私たちを追いこんだだけじゃまだ足りないの！？

そこへ颯爽と午平が現れる。

午平　うちの経営不振の原因は、不況や海外旅行ブームや、なにより俺の営業努力が足りなかったせいだ。

紀子　午平さん！

午平　スマレ、そんなに目くじらをたてると、小じわが増えるぞ？

スマレ　（猛獣が吠えるように）うるさい！

午平　（あつという間に萎縮して）俺はただ……美人が台無しだよって……。

スマレ　よくも抜け抜けとそんなことが言えるわね！

紀子　（事態がわかっていないトミオに）スマレさんの旦那さんですよ。

トミオ　（午平の手を取り）お兄さんですか！　僕とユリエさんの応援に駆

けつけてくれたんですね！

午平　……君、楽天的な性格って言われるだろう？

スマレ　なにしに來たのよ。荷物をまとめに？　あなたならリュックひとつ

でどこでだって暮らせるでしょう？　若い時からそうやって日本中旅して

きたじゃない。どうぞ昔のように、土地土地の女に養ってもらいながら、

渡り鳥みたいに勝手気ままに生きればいいわ！

午平　（照れて）俺はそれほどモテなかったよ。

スマレ　褒めてんじゃないのよ！　出ていけって言ってるの！

午平　（真顔に戻って）スマレ……。俺が悪かった。もう一度やり直してく

れ。

スマレ　なにを今更……。

午平　許してくれるまで何度だって謝る。

スマレ　何度謝られても気持ちちは変わりません。

そこへ絹代がさ迷い出てくる。

絹代　「ああ、蝮の心を、花の顔かんばせが隠していたのか！　あれほど美しい洞ほくらに

も龍が潜むものか？　美しい暴君、天使のような悪魔、鳩の羽をつけた鴉、

狼のように貪婪どんらんな小羊！　表は神に似ながら卑しむべき心の内、見掛けと

は似てもつかぬ……忌まわしい聖者、気高い悪党！」

午平 (スマイレに) お客様だってああおっしゃってるぞ？

スマイレ どうしてこんな時にふざけていられるのよ！ あなたのそういうところが信用できないんじゃない！

紀子 山田様、今はちよつとタイミングが……。

絹代 「これほどの嘘偽りがあれほど華やかな宮殿に潜んでいようとは！」

午平 気の迷いだったんだ。本気じゃない。俺にはおまえしかいないんだよ。

絹代 「そんな事を、舌が爛ただれておしまい！」

スマイレ お客様がああおっしゃっているけど？

絹代 「ああ、私はなんとという人でなしなのだろう、あの方を悪あしざまに罵るなんて！」

紀子 (絹代を取り押さえながら) 続きはお風呂でなさいましな。よく通るそのお声をもっと響いて、気持ちのいいこと間違いなしですよ？

混乱のさなか、物陰から早苗と千夏がトミオを呼び寄せる。

トミオ、スマイレたちに気づかれないように、こっそりと呼ばれた方へ退場。

午平 (絹代と格闘している紀子を見て) 大変そうだな。なにか手伝えることは？

スマイレ そういうお気持ちがおありなら、今すぐここから消えてください。

午平 ……わかった……。またにするよ……。

午平、とぼとぼと退場。

絹代 「悪しざまに言えようか、自分の夫のことを？」

紀子 女将さん！

絹代 (午平の去っていった方を見送りながら) 「ああ、かわいそうな人、誰

の舌があなたの名をいたわってくれよう……」
スミレ（複雑な表情で一瞬、絹代を見つめてから）お騒がせして申し訳ございませぬ、山田様。さ、参りましょう。

スミレと紀子、絹代を連れて退場。

11

ユリエの部屋。

落ちつかない表情のユリエ。

そこへ早苗と千夏の手により、トミオが放り込まれる。

ユリエ トミオさん！

忍者のように素早く姿を消す早苗と千夏。

トミオ 会いたかった……！

トミオ、ユリエを抱きしめようとするが、するりと身をかわされる。

トミオ ユリエさん？

ユリエ（顔を背けて）トミオさん、私……。

トミオ どうしてこつちを見てくれないんです？ そんなふうにも目を背けたくなるほど、僕はやつれきったひどい顔をしていますか？

ユリエ（ちらりとトミオを見て）いいえ。まぶしいくらいお元気そう。

トミオ こうしてユリエさんに会えたからです。これでもあなたのことを思う余り、八百グラムほど痩せたんですが。

ユリエ トミオさん、私……明日の午後……。

トミオ (悲しげに) 知っています……。 「アレ」をなさるんでしょう？

ユリエ 「アレ」って……。

トミオ 地元の名士のご長男だそうですね……。 本当は、「アレ」なんかさせずに今すぐさらってしまってしまいたいけれど……。 (すがるように) でも「アレ」するからって、「ナニ」するわけじゃない！ そうですよね？

ユリエ 「アレ」とか「ナニ」とか、意味ありげな言い方はやめてください。

トミオ つらくて口に出せないんです。ユリエさんが……。他の男と……。 「アレ」を……。

ユリエ 「お見合い」です！

トミオ (聞いただけでショック) …… 「ソレ」をするなんて……。

ユリエ ……私だって、お見合いなんてしたくありません……。 でも……。

トミオ わかっています。お姉さんを傷つけないでしょう？ あなた
の望まないことは、僕も望みません。

ユリエ ごめんなさい……。

トミオ ユリエさんは、優しい人だ……。 だから、心配です。

ユリエ え……？

トミオ お姉さんや相手の方を傷つけないために、自分の気持ちを殺してしまおうんじゃないかって……。

ユリエ ……。

トミオ (不安になって) まさか、本当に断れないなんてことありませんよね？

ユリエ 私が好きなのは……。

スマイル (声だけ) ユリエ、ちよつといい？

ユリエ (慌てて) 逃げてください！ 早く！ その窓から！

トミオ (慌てて窓から逃げ出しながら) どうか続きを！

ユリエ え？

トミオ あなたが好きなのは？

ユリエ ……トミオさんだけです。
トミオ ……信じていいですね？

トミオが窓から出て行くと同時にスマイレが入ってくる。

スマイレ ……。話し声がしなかった？

ユリエ また山田様がなにか嘆いてらっしゃるんじゃない？

スマイレ (大きなため息) あの方、どうしたらいいのかしら。(首や肩をさすりながら) なんだか肩が重いわ。

ユリエ それが肩凝りよ、お姉さん！

スマイレ そう…。これが…。話に聞くとおり、全然いいものじゃないわね。

ユリエ 私、揉んであげる。座って？

ユリエ、スマイレを座らせて肩を揉もうとするが、スマイレは振り返ってユリエの顔をじっと見つめる。

ユリエ (やや戸惑って) なあに？

スマイレ (弱々しく) ……綺麗な髪ね。

ユリエ やだ、どうしたの？

スマイレ 柔らかそうな頬。くすんでもたるんでもいない、瑞々しくて張りのある肌…。あなたは若くて、本当に輝いている。男たちが夢中になるのも無理ないわ…。

ユリエ なに言ってるの、私なんかよりずっとモテたくせに。

スマイレ そうだったかしら…。

ユリエ そうよ、若い頃のお姉さんは…。(失言)！

スマイレ 確かに、あたしにもあったわね。鏡を見るのが楽しかった時期が…。

間。

ユリエ ……さつき、お義兄さんが来てたんじゃない？

スマレ 来た来た、性懲りもなく。すぐに追い返したけどしょうこね。

ユリエ どうして許してあげないの？ あんな大恋愛の末にようやく一緒に
なったのに。

スマレ それはあの人に訊いてくれる？

ユリエ お姉さん……。

スマレ あんな思いをしてまでようやく一緒になったのに、どうして？って。

ユリエ ……今でも、お義兄さんのこと好きでしょう？

スマレ あたしたちを見ていてわからない？ 燃え上がってしまったら、後
は燃え尽きるしかないの。なんにも残らない。若さも情熱も、誰かを惹き
つけておけるような魅力もね。

ユリエ お姉さんはとつても魅力的よ？

スマレ ……あたしは臆病なのよ。

ユリエ お姉さんみたいに強い人なんていないじゃない。

スマレ 一度裏切った人間を、もう一度信じる勇気がないの。

スマレ、ユリエを抱き寄せる。

スマレ ユリエは姉さんを裏切ったりしないよね？

ユリエ 私は……。

スマレ 信じていいよね？

ユリエ ……。

姉妹が抱き合う中、暗転。

同じ日の夕暮れ時。

雲雀旅館の庭先を、未練がましくうろついている午平。

そこへ亜紀が姿を現し、背後から声を掛ける。

亜紀 こんにちは。もう「こんばんは」かしら。

午平 (振り向きなりすさまじく驚いて) ぐげっ！

亜紀 ……なんですか？「ぐげっ！」って。

午平 (軽いパニックに陥り) あの、えーっと、あれ？ ええっ？

亜紀 この時間になると急に涼しくなりますね。

午平 亜紀ちゃん……？

亜紀 やっぱり緑が多いからかな。

午平 ……ここで、なにしてるの？

亜紀 温泉旅行ですよ？ 門田さんご自慢の旅館がどんなところか確かめたくて。

午平 確かめたくて……。

亜紀 女将かたさんもお綺麗な方で。

午平 うん。いや、その……。

亜紀 なかなかお許しが出ないみたいですね。もうすっかり元の鞆さやにおさまってらっしゃると思ったのに。

午平 はは……まあ、なんというか……。カッコ悪いところを見られちゃったな。亜紀ちゃんにはせっかく渋い大人の男で通してきたのに。

亜紀 渋い大人の男で通してたんですか？

午平 あれ？ 通ってなかった？

亜紀 ええ、まったく。てっきり落ちつきのないやんちゃ坊主を貫いているのかと思ってました。

午平 おかしいな……。

亜紀 だって、やたらと裸足になりたがるし、お鍋が煮えるのを待ちきれずに、生の肉にはがつつくし、食べるとすぐ眠くなるし……。

午平 そうか……。それはただの子供だな……。

亜紀 初めて会った時だって、ズボンが破けてたじゃないですか。途中で転んだとか言ってる。

午平 ……急いでたんだ。遅れちゃ失礼かと思ってる……。

亜紀 破けたズボンで打合せに来る方が失礼ですよ。

午平 きれいに繕ってもらったんだよね。担当者が君で助かったよ。

亜紀 私とのが原因で、こうして追い出されているの？

午平 (考えて) ……うん。それでもあの時は助かった。

亜紀 ……相変わらずですね。

午平 君といるのは楽しかったし。

亜紀 平気でそんなことを言う……。

午平 ……亜紀ちゃん、ごめんね。

亜紀 ……なにがですか？

午平 ……なんとなく……。

亜紀 「気の迷いだったんだ。本気じゃない。俺にはおまえしかいないんだ

「よ」

午平 ……聞いてたの？

亜紀 聞こえたんです。

午平 ……ごめんなさい……。

亜紀 謝ることないですよ。あなたは私に、一度も嘘なんかつかなかったし、お互い割りきったお付き合いだったじゃないですか。最初から。

午平 そうかもしれないけど……。

亜紀 最後までね……。

間。

亜紀 第一、もう終わったことですよ。

午平 でも……だったら、なんで？

亜紀 私が奥様に、「ご主人の浮気相手は私です！」と名乗りを上げに来たのもも？

午平 （怯えて）そうなの？

亜紀 本当にただの旅行ですって。恋に傷ついた友達を慰めるためのね。本人はそんなことも忘れて、すっかり元気になっちゃってますけど。

午平 それはそれは……ようこそお越しくございました……。

亜紀 ……そんなふうには、また奥様と一緒に働ける日が早く来ることをお祈りしています。

亜紀、静かに退場。

それを見送る午平。

暗転。

13

翌日。

森中神社の境内に浮かぬ表情でしゃがみこんでいるトミオ。

そこへ江美が現れる。

江美 （トミオを見つけて）あ！ ホテルのボンボン。

トミオ （力なく）今、何時？

江美 十時を回ったところです。

トミオ （ため息）まだそんな時間か……。

江美 なにやってるんですか？　こんなところで。

トミオ 今日という日が一刻も早く過ぎていくのを待ってるんだ……。

江美 （トミオの答えを無視して賽銭を投げ、拍手を打ち）ユリエさんのお見合いが無事に成功しますように！

トミオ （慌てて自分も小銭を投げ）神様！　今のは聞かなかったことにしてください！

江美 なにするんです？

トミオ なんて恐ろしいことを願うんだ君は……。

江美 あなたもユリエさんのことが好きなら、ユリエさんの本当の幸せを願うべきですよ？　まあ、わがままなお坊ちゃんには無理な話でしょうけどね。

トミオ 好きでもない男と結婚することのどこが幸せなんだ！

江美 （ため息）問題はそこなんですよね……。　（胡散臭そうにトミオを眺め）こんな男のどこがいいんだろう。有栖川先輩の方が何十倍もカッコイイのに……。　あたしがユリエさんだったら、喜んでお嫁にいくのになあ……。

トミオ だったら君がお嫁にいつてくれよ。

江美 （逆ギレ気味に）だから！　断られたって言うてるでしょう？　何度言わせれば気がすむんですか！

トミオ （ひるんで）初めて聞いたけど？

江美 いくらしつこいあたしだって、七回も振られたらいい加減あきらめませよ。

トミオ 七回か……。　すごいな。

江美 表向きには五回ってことにしてるんですけどね……。　この七年間、二月十四日が来る度に告白してきたけど、全戦全敗で……。

トミオ ……甘いな。

江美 え？

トミオ いいかい？　バレンタインデーなんて日には、幼稚園児からおじいさんまで、男という男が「今日、誰かに告白されるかもしれないぞ」って

朝から淡い期待に胸を膨らませているんだ。つまり、心の準備が出来ている。そんなところを狙ったってダメだよ。恋愛に大切なのは不意打ちだ。思ってもいない出会いが、心を揺さぶるんだよ。(遠い目をして) あの日、ユリエさんの美しく濡れた黒い瞳が、突然、僕の心を捕らえたように……。

江美 今更そんなこと言われたって……。

トミオ 君にとつても、今がチャンスだよ。

江美 (わずかに希望を見出し) チャンス？

トミオ だってそのアリなんとか先輩は、今日、ユリエさんに振られるだろう？ ショックを受けているところへ君が優しく慰めてあげれば……。

江美 (あからさまにがっかりして) なんだ、そんなことか……。

トミオ あくまで優しく、ロマンティックに慰めるんだ。間違っても「ケーキバイキングで憂さをはらしましょう！」なんてやっちゃいけない。君は食べ過ぎるから……。

江美 (慇懃に) お心遣いありがとうございます。でも、そんなことありえませんか。

トミオ どうして？ だってユリエさんは……

江美 ユリエさんは断ったりなんてしませんよ。

トミオ そんなはずは……。

江美 ユリエさんは断れません。断りたくてもね。先輩と結婚すれば、雲雀旅館はつぶれなくてすむですよ？ ご両親が大事に守ってこられた旅館を、見捨てるような真似するはずないじゃありませんか。なによりも、御主人に裏切られて傷ついてる女将さんを、悲しませるようなことができるはずありません。

トミオ でも、ユリエさんははっきり僕に言ったんだ！

江美 なんて？

トミオ 「お見合いなんてしたくない」って。

江美 あとは？

トミオ 「私が好きなのは、トミオさんだけだ」って。

江美 他には？

トミオ (脳内の記憶データを必死に検索中)

江美 お見合いを断るって言いましたか？

トミオ (検索終了。愕然と) ……言っていない……。

江美 無理なんですよ。そんなことができる人じゃないんです。そういうユリエさんの気持ちも知らずに、「君を信じて待ってる」とかなんとか言ったんじゃないでしょうね？

トミオ (驚き) 聞いてたのか!?

江美 (ため息をついて) これだからお坊ちゃんは……。

トミオ (思いつめていたが) こんなことしてる場合じゃない……! (と駆け出して行く)

江美 あ! ちょっと! 余計なことしないでくださいよ!

江美、トミオを追って退場。

14

同じ日の雲雀旅館。

スマイレが現れる。

スマイレ ユリエ! もう支度してる?

美しく着飾ったユリエが暗い表情で現れる。

スマイレ どうしたの? そんな暗い顔して。綺麗なお洋服が台無しじゃない。

ユリエ お姉さん、あのね、私……。

スマイレ なぁに?

ユリエ お腹が痛いかも。だから……。

スマレ ……ユリエ。

ユリエ なんだか頭もズキズキして……。

スマレ あなたは昔つから、遠足の前日とか、試験の朝とか、ピアノの発表会の前になると、必ずお腹が痛いだの頭が痛いだの言い出すんだから。

ユリエ やっぱり、私、今日行けない。

スマレ どうして？

ユリエ それは、あの……（思いついて）昨日、お風呂に入っていないから！

スマレ まあ、大変！ お見合いは取りやめてもらわなくっちゃ！

ユリエ （目を輝かせて）ほんと？

スマレ ……なんてことになるでも思った？

ユリエ 一瞬だけ……。

スマレ そんなに緊張することないわ。有栖川さんはいい方よ？

ユリエ それは江美ちゃんからたっぷり聞いたけど……。

スマレ あたしはなにも旅館への援助欲しさにこの話を勧めてるんじゃないの。そんなことは二の次。あの人だったら、必ずユリエを幸せにしてくれるって信じてるからなのよ？

ユリエ わかってる……。

スマレ だったらそんな顔しないで。まさかとは思うけど、本当にお風呂に入っていないなら入ってらっしゃい。まだ出掛けるまでは時間があるから。

スマレ、退場。

がつくりと肩を落すユリエを、亜紀、早苗、千夏の三人が遠くから見守っている。

亜紀 かわいそうに。生贄いけにえに捧げられる村の娘みたいな顔して。

千夏 もしくは市場いちばに売られて行く仔牛だね。ドナドナだ。

早苗 ちよつと元気づけてあげようよ。

三人、ユリエを取り囲む。

千夏 一緒にひとつ風呂浴びてくるか！ ん？

早苗 (そんな千夏はさておき) そんなに深刻に考えることないって。お見合いなんてさ、集まりの悪い合コンだと思えばいいよ。

亜紀 あんた、昨日まで駆け落ちしろってけしかけてたじゃない。

早苗 やっぱり選択肢は多い方がいい。だってもしかしたら、本当にトミオ君よりいい男かもしれないだよ？

ユリエ 私、いい男なんて好きじゃありません。

早苗 トミオ君はいい男じゃん。

亜紀 ユリエさんが言ってるのは、好きになったのがたまたまいい男だったってことで……。

ユリエ 違います。

千夏 違うってさ。

ユリエ いい人でも、いい人じゃなくても関係ない……。私はただ……。

亜紀 ……とにかくトミオ君が好きなのね。

早苗 そこまで言うなら駆け落ちしかないよね？

千夏 いや、お見合いはしといた方がいいって。ご馳走だって食べられるし。

早苗 イギリスに逃げたら？ トミオ君、留学してたんでしよう？

千夏 イギリスには美味しいものがないって言うよ？

早苗 亜紀！ 食べ物のことしか頭にない奴は黙ってるように言ってよ！

亜紀 ねえ、ユリエさん。ただじつとしているままで手に入るものなんてないよ。失うものはあってもね。前にも言ったけど、あなたが決めるしかないの。それで思い知るしかないんだよ。自分がどんなものを捨てていく人間なのかをね。

千夏 ……妙に重みのあるお言葉ですなあ。

ユリエ ……一人にしてください。お願いします。

三人、顔を見合わせてから退場。
入れ替わるように絹代が姿を現す。

絹代 「ああ！ 扉を閉めて下さいまし、そして、その後で、一緒に泣いて
下さいまし！ もう私には希望も、手立ても、救いもない！」

ユリエ （ほとんどげんなりと） 山田様……。

絹代 「この真心が謀反を起こして別の男へなびくなら、その手も心もこの
刀で殺してしましましょう」

ユリエ 一人にしてください……と言っても無駄ですよ……。

絹代 「さ、早くなんとか。お助け頂けぬのなら、早く死にとうございます」

ユリエ 本当に……そんな気分です……。いつそ死んでしまいたい……。

絹代 （それまでの情熱的、かつ芝居がかった様子から一転、非常に冷静に）
つきあってあげましょうか？

ユリエ （静かに驚き）……え？

絹代 （ポケットからゆっくりと葉ピンを取り出し）一緒に、死んであげま
しょうか。

静かに微笑みながらユリエを見つめる絹代。

金縛りにあつたように動けないユリエ。

暗転。

その情けない姿を、背後から紀子が見守っている。

紀子 あのね、午平さん。

午平 (驚いて) どへっ！

紀子 なんですか？「どへっ！」って。

午平 なんだ紀子さんか。ちよっと見ない間に少し痩せたんじゃない？

紀子 痩せやしませんよ。これっぽっちも。

午平 そうかな。顔がすつきりしたみたいだけど。

紀子 ほっぺの肉がおなかまで下がってきてるだけです。そんなことよりも、今日は出直した方がいいですよ？ ユリエさんのお見合いで、スマレさん、ただでさえピリピリしてますからね。

午平 ユリエちゃん、お見合いするの？

紀子 ええ。有栖川先生のご長男とね。

午平 あれ？ でも、昨日の彼は？ ユリエちゃんの恋人だろ？

紀子 だからスマレさんはピリピリしてるんじゃないですか。

午平 無理やりお見合いさせるの？ そりゃ可哀相だよ。

紀子 午平さんのせいですよ。

午平 俺え？

紀子 ご自分でおっしゃったでしょ？ 雲雀旅館が火の車なのは仕事をさぼってフラフラ遊び歩いてたせいだって。

午平 政略結婚なのか？

紀子 でもね、幸い、お相手の方はどこをとっても文句のつけようがない好青年ですし、なによりユリエさんにぞっこんですからね。

午平 だけどユリエちゃんの気持ちは……。

紀子 それも午平さんのせいですよ。

午平 また俺え？

紀子 スマレさんは恋愛結婚なんて碌ろくなことにならないって思ってるんです。理由は言わなくてもわかりますね？

午平 (萎縮して) わかりますですけど……。

そこへ京子が慌てた様子で華やかに登場。

京子 雲雀旅館の方？

午平 はい……。

京子 すみませんがこちらに……。

紀子 (京子を見てハツとして) あなた女優さんじゃありません？

京子 ええ、まあ……。

紀子 (舞い上がって) あたし、本物の女優さんなんて見るの初めて。確か、先週のサスペンスドラマで殺されてましたよね？

京子 先週……？ ああ、そうかもしれません。

紀子 あたし、途中で寝ちゃったんですけど、犯人は誰だったんです？

京子 いつ撮ったヤツかしら……。私、よく殺されるもので……。

午平 あのー、それで御用件は？

京子 (我に返り) こちらに「山田絹代」という人が泊まってはいないでしょうか？

紀子 いらっしやいますよ！ ご家族と御連絡がつかなくて困っていたんです。

京子 生きていますんですね！？

紀子 ええ。それはもうお元気ですよ。

京子 (安堵のため息をついて) よかった……。

紀子 頭を打ったショックでご自分をジュリエットだと思い込んでいらっしやいますけれど……。

京子 ……ジュリエット？

午平 失礼ですが、あなたは……？

京子 (毅然と) 女優です。

午平 いや、それは伺いましたが……そのお客様との御関係は……。

京子 ああ。古い友人です。同じ劇団の仲間なんですが……。

午平 「生きてるんですね」ってどういう意味ですか？

京子 最近、彼女と連絡が取れなくなつて、部屋に行つてみたら、（バッグから手紙のようなものを取り出し）こんなものが。

午平 なんですか？

京子 遺書のようなんです……。

暗転。

雲雀旅館の中。

早苗、亜紀、千夏が現れる。

亜紀 そつとしておこうよ。一人にしてつて言ってるんだから。

早苗 そう言うけどさ、あんなおとなしい子に自分で決めさせるのは酷だつて。そんなことが出来るくらいなら、今頃イギリス行きの飛行機の中で、トミオ君とイチャイチャしてるはずだよ。ここは人生の先輩として、より実用的なアドバイスをしてあげるべきだね！

千夏 んで？ 早苗先輩はなにをアドバイスする気にいるわけ？

早苗 まずは、お見合いで嫌われる極意。

千夏 なるほど。

早苗 次に、家族への嘘のつき方。

千夏 （頷きながら）実用的だ。

早苗 これくらいしてやらないと、思いつめてなにしかすかわからないよ？

亜紀 （呆れながら）優しいんだね、早苗は。

早苗 そうだよ？　なのになんで売れ残ってるのかさっぱりわからない。（袖に向かつて）ユリエさん。ちよつといいかなあ？（と入って行く）

千夏 （講談風に）アドバイスを真に受けて、まるで早苗のようになった彼女を、果たしてトミオ坊やは愛し続けることができるだろうか？

亜紀 これ以上首突っ込まない方がいいって。あたしたちは明日になったら帰っちゃうんだから。

千夏 亜紀には感謝してるよ。こんな面白い旅館に連れてきてもらってさ。

亜紀 そりやどうも。

千夏 ……なんでここに決めたんだっけ？

亜紀 なんであって……。

千夏 昨日、乱入してきたあの旦那さんさあ……。

早苗が血の気の失せた表情で戻ってくる。

早苗 ……一一九番……。

千夏 は？

早苗 救急車二台……早く！

亜紀 ……どうしたの？

早苗 ユリエさんとジュリエットが倒れてる……。

暗転。

雲雀旅館の一室。

ぼんやりとした様子で座っている絹代。

そんな彼女を取り囲むようにして、一同が会している。

但し、ユリエは部屋の隅に敷かれた布団に眠ったまま。
その傍らにはトミオが悲痛な顔で付き添っている。

絹代 (まだぼんやりしたまま) すみませんでした……。

紀子 すみませんですむとお思いですか？ あなたユリエさんを殺そうとしたんですよ！？

千夏 二人で菓を分けたのが幸いしたな。ぐっすり眠っただけでよかったね。

早苗 ほんとだよー。あやうく死体の第一発見者になるとこだった。

トミオ ユリエさん……。

亜紀 (絹代に) いつから正気に戻っていたんです？

絹代 みなさんがもめている中、そちらの御主人がいらして、奥様に「うるさいっ！」て怒鳴られた時に……。

紀子 (うんざりと) また午平さんですか……。

午平 ええ？ それも俺？

トミオ ユリエさん！ お願いです！ 目を開けてください！

絹代 (つぶやくように) 気がついたら……昔覚えた芝居の台詞を喋って……。

トミオ このままユリエさんが永遠の眠りについてしまうようなことがあったら、僕は一体どうすればいいんだ！

絹代 もう、二十年も前に……演じたきりの役だったのに……。

トミオ どうしてあの時、その手を放してしまったんだろう！ 世界を敵に回しても、僕はあなたを連れ去るべきだったのに！

早苗 すいません。外野がうるさくてよく聞こえないんですけど。

トミオ ユリエさん！ 僕の声に応えてください！ ユリエさん！

スマレ ……江美ちゃん。

江美、すばやくトミオに当て身を食らわせる。

トミオ、ユリエの上に折り重なるように失神。

江美 続きをどうぞ。

絹代 あのお嬢さんを、道連れにする気なんてなかったんです……。だけど……許されない恋に苦しんでいる彼女がまるで、本物のジュリエットみたいに思えて……。

紀子 ジュリエットなんて架空の人物じゃないですか！ そんなものごとつちやにされて殺されたんじゃないかもしれませんよ！

京子 (絹代に) 絹代！ どうしてこんなバカなこと！

絹代 京子……こんなところでなにしてるの？

京子 それはこっちのせりふでしょう？ どれだけ心配したと思ってるの!?

絹代 ……(みんなに) 彼女、女優なんですよ。

早苗 あ！ 知ってる！ この間、テレビの時代劇で悪いお侍に斬られてた！

絹代 うちの劇団で一番の売れっ子なんです。私はずっと彼女の代役で……。

京子 そんなこと、今はどうだって……！

絹代 よくないでしょう？ 今、本番中じゃない。

京子 ……明日一番で帰れば、夜の公演には間にあうから。

絹代 京子は舞台に穴を開けたことなんてないもんね……。ほら、この間だって、お医者さんが止めるのもふりきって。(みんなに) 普通、降りると思いませんか？ おたふく風邪だったんですよ？

亜紀 それで舞台に立ったんですか？

絹代 ええ。パンパンに腫れたほっぺたで。

京子 だってあれは怒ってばかりいる役だったし、ふくれっ面に見えれば大丈夫だろうって……。

千夏 見たかったなあ、その舞台。

絹代 なんて欲の深い女だろう……。

間。

絹代 私のささやかなチャンスを潰してまで舞台に這いあがって行く。なんて自分勝手に傲慢な女だろう。あんたがいる限り、私に出番は回って来ない。京子なんていなくなればいいのにつて、ずっと思ってた。

京子 ……私だつて思ってたわよ。研究生の卒業公演で、あなたがジュリエットを演^やった時。

絹代 私さえいなければつて？

京子 ええ。

絹代 あの時、酔つて暴れて、アパートのドアを壊したのはそのせい？

京子 そうよ。

絹代 私なんか死ねばいいと思つた？

京子 そこまでは思わなかつたけど……。

絹代 私は思つた。京子なんて死ねばいいつて。

京子 いくらでも思えばいいじゃない。それをバネにしてがんばつていくんじゃない！

絹代 京子はそうやってきたのよね。

京子 そうよ。誰に何を言われようと、この役は自分にしかできないつて信じて舞台に立つてきた。この自分を通して、物語を客席に届けるんだつて、それだけを考えて……。

絹代 だからあなたは選ばれるのね。

京子 絹代だつてそうだったでしょう？ あなたのジュリエットは最高だつた。あれはあなたにしかできなかった。悔しかつたけど私は……！

絹代 私も同じよ。京子の舞台を観て、お客様が惜しみなく拍手を送りたいのは私じゃないつてわかつた……。みんなが求めているのは、私なんかよりも、おたふく風邪で顔を腫らした京子の方。死ねばいいのは、私の方だつたのよ……。

午平 なにも死ぬことはないじゃありませんか。

絹代 結婚もしない、子供も生まない、お金もいらぬ。その代わりに、た

くさんの人生を舞台の上で生きるんだって、ずっとそう思ってきたんです……。なのに、客席に私を待つてる人は誰もいない……。誰にも望まれていないのに、どうして生きていなくちゃいけないんですか。

午平 どうしてって言われても……。

早苗 なんか分かる気がする。あたしも時々思うもん。子供も産まずに、自分のためだけにお金稼いで、あたしが生きてる意味ってなんなのって。

亜紀 その意味を考えるために、生きてみるのもいいじゃない。

千夏 そうだよ。きつと答えが見つかる前に、イヤでもあの世からお迎えが来るから。

絹代 ……よくここがわかったわね。

京子 だって、「雲雀旅館」でしょう？ 「雲雀」の科白は絹代のお気に入りで

だったじゃない。ジュリエットの死ぬラストシーンの次に好きだって。

絹代 ラストシーンか……。「……あ、あの声は？ 早くしなければ。おお、幸いここに短剣が、（短剣を取る仕草）この身をおまえの鞘に、（自分を刺す）いつまでもそこに、そして私を死なせておくれ（倒れる）」

千夏 また自殺しちゃったよ？

絹代 ……（ゆっくりと起き上がり）ジュリエットは死んだの。私の出番は終わり。これですつきりした。この旅でジュリエットになりきって、もう気がすんだ。……役者はやめるわ。

京子 絹代……。

絹代 長いこと舞台を離れていて、私は客席のことも物語のことも忘れてた。自分のことしか考えていない役者の芝居なんか観ても、お客さんが楽しんでくれるはずなのよね。これからは私も、いい舞台を作るために頑張る。京子の代役としてじゃなくね。

京子 ……後悔しない？

絹代 楽になるわ。友達が死ぬことを、もう願わなくてすむんだもの。

京子 ……わかった。

絹代 （スマイレに）妹さんのこと、本当に申し訳ありませんでした。

スマイレ ……お二人と一緒に、お風呂に入られてはいかがですか？ 東京に戻られたら、忙しい毎日がお待ちでしょう。今日はこの雲雀旅館でゆっくりと、羽をのばしておくろぎくださいませ。

絹代 ありがとうございます…。

スマイレ お足元にだけはくれぐれもお気をつけくださいますように。

絹代と京子、頭を下げながら退場。

紀子 あの女優さんがドラマで殺されてばかりいたのは、山田様の呪いだっ
たのかもしれないねえ…。

ユリエがむっくりと起きあがる。

ユリエ 私、どうしたんだっけ…。

江美 大丈夫ですか？

ユリエ (自分に覆い被さるように倒れているトミオに気づいて) トミオさ
ん？ どうして！

紀子 大変だったんですよ。ユリエさんが目を覚まさないって大騒ぎして。

ユリエ まさか、私が死んだものと勘違いして、後を追ったんじゃないか…。

千夏 後を追ったと言うか、追わされたと言うか。

ユリエ ごめんなさい！ 私が早まったことをしたばかりに！

早苗 そうじゃないの、彼があんまりうるさかったもんだから…。

ユリエ (トミオの手を取り) まだ温かい…。どうして待っていてくれな
かったの？

亜紀 ほんとに違うんだって！ なんであなたたちカップルは人の言うこと
を聞かないの？

ユリエ 待っててトミオさん！ 一人にはさせないから！ 私もすぐにあな
たの後を…！

スマイレ ……江美ちゃん。

江美 (気乗りしない様子でややためらいながら) 失礼します。

江美、ユリエに当て身を食らわす。

再び倒れ込むユリエ。

千夏 面白すぎるよ。

紀子 ユリエさんにこんな気性の激しいところがあつたなんて……やっぱり血は争えませぬねえ。

亜紀 ……(スマイレに)これでもまだ、二人の仲を許す気にはなりませんか。スマイレ ……。

亜紀 こんなに、見ている方が恥ずかしくなるくらいお互いを必要としている二人を、それでも引き離そうとお考えですか？

早苗 許してあげたらどうですか？ 確かにこののぼせ上がり方は異常だし、若気の至りって言っちゃえばそれまでだけど。

紀子 女将さんはね、ユリエさんに自分の二の舞をさせたくないんですよ。
しんじゅう 心中騒ぎまで起こした末の結婚に、結局失敗してるから。

午平 紀子さん、俺たちは離婚したわけじゃあ……。

千夏 心中騒ぎ？ この旦那さんと？

紀子 結婚を認めてくれなきや死ぬって二人で立てこもって。ちょうどこのお部屋でしたよ。お互いの喉元に包丁を突き付けてねえ。あの時は生きた心地がしませんでした。なにしろ午平さんときたら、緊張のあまり手がぶるぶる震えちゃって。いつ包丁の先がスマイレさんの喉に刺さるかって気が気じゃありませんでしたよ。

スマイレ 江美ちゃん。

江美、渋々紀子にも当て身を食らわせようとするが、逆にその手をねじ上げられる。

紀子 (何事もなかったかのように) それでとうとうご両親も、折れるしかななくてねえ。

江美 (スマイレに) ダメです。相手が悪すぎます。

早苗 なんだあ、お姉さんだってそんな情熱的な時があったんじゃないですか。

スマイレ 今は後悔しています。あんな猿芝居を打ったこと。

午平 俺は芝居じゃなかったけどね……。

間。

午平 あの時、この人と一緒になれないなら、本当に死んでもいいと思った。

他に欲しい物なんてなんにもなかった。結婚を許してもらえた時は、天にも昇る気持ちだった。俺は後悔なんてしてないよ。

スマイレ あなたは我慢をしないからでしょ。いつでもその時、一番欲しい物を手に入れ続ける。欲張りな子供とおんなじよ。

午平 (一瞬、亜紀の方を見て) ……よく、言われる……。

スマイレ 自分に正直に生きるのは、さぞ気持ちがいいでしょうね。

午平 だって、嘘は体に良くないよ。

スマイレ ……そうやって、あなたはなにも引き受けない。心配も責任も全部あたしに押しつけて、自分一人、身軽にどこへでも行ってしまおう。そんなふうには振りまわされるのはもうたくさんの！ お天気次第でいつ変わってしまいかもわからない人を、怯えながら待つのは耐えられないの！

午平 怯えることなんてないじゃないか。俺はいつだってこうして戻ってくるのに。

亜紀 それは……待たせる側の言い分ですよ。

間。

亜紀 待つことの怖さを知らない人の、無邪気で無神経な言葉です。

午平 ……そうかもしれない。確かに俺は、自分勝手に子供で、風向き次第でコロコロ変わってしまうでしょうもない男だよ。

紀子 今頃わかったんですか？

午平 だけど、変わらない人間なんているのかな？

紀子 この期に及んでまだそんなことを。

午平 俺たちがそうだったように、ユリエちゃんたちだって、熱病みたいな今の激しい気持ちで、いつか醒める時が来るだろう。

江美 だから女将さんは反対してるんじゃないですか。

午平 それを怖がっててもしょうがないよ。時間に逆らっても勝てるわけない。変わっていくことをお互いに認めあわなきゃ、一緒に生きて行く意味なんてないんじゃないか？

スマレ 体のいい言い訳ね。

午平 変わらないことがすべてじゃないだろ？

スマレ ……江美ちゃん。

江美 はい。(と、午平を眠らせるべく近寄って行く)

スマレ そうじゃなくて。出掛ける準備をしてちょうだい。

江美 あの、どちらへ？

スマレ 有栖川先生のところへお詫びにいくのよ。今回のお話はなかったことにしていただくから。

江美 え…でも…

スマレ あたしのかわいいお人形さんみたいだった妹は、山田様のジュリエットと一緒に死んでしまったわ。生まれ変わってきたのは、愚かな姉によく似たバカな女の子。有栖川先生のもとへ送り出せるような花嫁はいなくなってしまうんだもの。

江美 (一人つぶやくように) チャンスかな…

スマレ ほら、早く菓子折りの用意をして！

江美 はい！（と退場）

スマイレ （紀子に）この人騒がせな二人が目覚ましたら、よろしく頼むわね。

紀子 （懐かしいものを見るように）スマイレさん……。まるで亡くなったお母様を見ているようですよ。先代の女将さんも、あの時、私におっしゃったんです。「この人騒がせな二人をよろしくね」って。

スマイレ （肩を揉みながら）今回の件ですっかり肩凝りデビューよ。ホテルの息子には約束通り肩を揉ませてやる。

早苗 あのー、話がハッピーエンドに収まりつつあるみたいですけど、ご主人のことはどうされるんですか？

午平 俺も肩揉みは得意だけど。

千夏 本人、戻る気満々ですよ。

亜紀 もうお許しは出たんじゃないですか？

早苗 え！ わかんなかった。いつ？

亜紀 変わっていくことを、もう怖がらないんですよね？

スマイレ ……私も、もう以前の私ではありませんから。

スマイレ、退場。

ユリエとトミオが同時に目を覚ます。

トミオ ここは……天国か？

ユリエ 私たち、同じ夢を見ているのかも。

トミオ 夢の割には、みぞおちの辺りが殴られたように痛むのはなぜだろう……。

千夏 （トミオの肩を力強く叩き）おめでとう！ 肩揉み奴隷に合格したぞ！

紀子 よかったですね、お二人とも。スマイレさんのお許しが出ましたよ。

トミオ 本当ですか！

紀子 まあこれも、午平さんのせいとかおかげというか……。

ユリエ お義兄さん！ 帰ってきてくれたの？

午平 そうやって喜んでくれるのはユリエちゃんだけだよ。

早苗 夕食を豪華にしてくれるとか、なにかサービスでもしてくれれば、あたしたちだって喜んであげますよ？

午平 (亜紀に) ……君も？

亜紀 ……もちろん。

暗転。

18

翌朝。

雲雀旅館の玄関先。

絹代と京子を見送るために、全員が出揃っている。

京子 (神妙に) 本当に、昨夜はすみませんでした。ひさしぶりに絹代とゆ

っくり話が出来たもので、つい羽目はずしてしまつて……。

スマレ お楽しみいただけたようでなによりです。

絹代 この人、昔から酒癖が悪いんです。

京子 襖の弁償代は、劇団宛てに請求してください……。

絹代 今度は仲間たちも引き連れて泊まりに来ますから。

亜紀 東京に戻ったら、舞台を拝見しに行きますよ。

京子 是非いらしてください。今回、私、殺人鬼の役なんです。

絹代 普段ドラマで殺されてばかりいる恨みを晴らすかのような力演ですよ。

京子 ここぞとばかりに殺しまくっています。

千夏 楽しみだなあ。

絹代 (ユリエに) 本当にごめんなさいね。でも、あなたのおかげで生まれ

変わることができました。ありがとうございます。

ユリエ 私の方こそ。

絹代 お幸せにね。

京子 絹代、電車の時間が。

スマレ (午平に) 駅まで送って差し上げて。

午平 それが……今、免停をくらってて……。

スマレ ! どうしてあなたはいつも肝心な時に……!!

紀子 私が行きますよ。(絹代たちに) さ、こちらへどうぞ。

午平 悪いね、紀子さん。

紀子 仕方ありませんよ。午平さんとスマレさんのことをくれぐれもよろしくってというのが、先代の女将さんの遺言ですからね。

絹代、京子、紀子が退場。

江美 (ものすごく朗らかに) 鶴の間の襖、ちょうど張り替えようとしてたところだったからよかったですね!

スマレ 江美ちゃん! お客様の前で!

早苗 なんだかずいぶん御機嫌じゃない?

江美 有栖川先輩に会ってきたんです。ユリエさんに振られて弱っている今がチャンスかなと思って。

千夏 いいねえ。あんた大物になるよ。

江美 「ケーキバイキングで憂さをはらしましょう!」って誘ったら、一緒に行ってくれるって!

トミオ 僕の忠告は聞かなかったんだね……。

江美 (トミオに) ケーキいっぱい用意しておいてくださいね!

トミオ よく言っておくよ。

亜紀 さて、あたしたちもそろそろ出発しようか。

トミオ 僕の手で送りますよ。

ユリエ あたしもついていっていいかしら？
トミオ お姉さんのお許しがいただければ。

トミオとユリエ、潤んだ瞳でスマレを見つめる。

スマレ ……勝手にしなさい。

トミオ 「勝手にしなさい」……なんて寛大な言葉なんだ。

ユリエ ありがとう。お姉さん。

トミオ 車を回してくる。帰りは二人でドライブだね。

ユリエ 待って！ 私も。

江美 みなさんのお荷物、運んじやいます！

トミオとユリエ、手をつないで退場。

続いて、亜紀たちの荷物を軽々運びながら江美も退場。

早苗 ねえ、ちよっとトイレ行っていい？ なんかおなかの調子が悪くて。

亜紀 昨日あんなに食べるからだよ。

早苗 だって蟹の食べ放題だよ？ 胃袋の許す限り食べ尽くさなきゃ、蟹に

失礼してもんでしょ？（と旅館の中へ）

千夏 いやあ、堪能しましたよ。太っ腹だね、旦那さん。

午平 気持ちばかりのサービスですから。

やや沈黙の時。

千夏 ……なんかあたしも胃が張ってきたな。（スマレに）胃薬って貰えます？

スマレ ええ、お出ししますよ。ではどうぞ中へ。

スマイレと千夏、旅館の中へ。
間。

午平 ……体に、気をつけてね。

亜紀 ……本当はここには、幽霊を見に来たんです。

午平 うちの旅館、そんな評判が立ってるの？

亜紀 あなたの幽霊ですよ。

午平 ……俺、いつの間に死んだんだっけ？

亜紀 私といた頃のあなたはもうどこにもいない。死んでしまったのと同じです。ここにいるのはきつと、あなたによく似た幽霊だろうって、それを確かめに来たんですよ。

午平 ……。

亜紀 死んでました。確かに。子供っぽいところだけはよく似ていたけれど。

これでもう…待たなくてすみませう。

午平 ……君が幸せになってくれると、うれしい。

亜紀 門田さんも、あの世でどうぞお幸せに。

早苗、千夏、スマイレが戻ってくる。

早苗 ごめんごめん。お待たせ。

スマイレ この度は本当になにかとお騒がせいたしました。これに懲りずに、今後ともどうぞご贔屓に。

早苗 絶対また来ますよ。ユリエさんたちの展開も楽しみだし。

千夏 (亜紀の肩を抱き、小声で) 傷ついた心は癒せたか？

亜紀 それは早苗でしょ？

千夏 あいつは完全に当初の目的を忘れてるみたいだからさ。

クラクションの音。

スマイレ ありがとうございます。

亜紀 大変お世話になりました。

スマイレ どうぞお気をつけて。

亜紀、早苗、千夏、退場。

深深と頭をさげるスマイレと午平。

午平 これから、仕事頑張るよ。

スマイレ (頭を上げた途端に) だったらなんで免停なんか食らってるのよ!

仕事にいきなり差し障ってるじゃない!

午平 いや、たまたまシートベルトをしてない時に検問にあったり、たまた

まスピードを出した時にねずみ取りがいたりで……俺、運がないんだよ。

スマイレ あなたは運がいい人よ。

午平 そうかなあ……。

スマイレ 相手が大人でよかったわね。

間。

午平 ……ぐえ?

スマイレ なんなの? 「ぐえ」って。踏み潰された蛙じゃあるまいし。

午平 え……いや、あの……。

スマイレ もう将来のある若い人を悲しませたりしないことね。

午平 ……思い出したよ。そうやって俺を、手の上で転がしてくれるような

ところを好きになったんだって。

スマイレ あたしも、自分が子供に弱いってことを思い出したわ。

午平 これから成長しますから。温かく見守ってくださいよ。

スマイレ 期待してませんけど。

スマイレと午平、旅館の中へ入っていく。

* 引用文 シェイクスピア『ロミオとジュリエット』福田恒存訳

了。